

深田河内遺跡

—津山中核工業団地埋藏文化財発掘調査報告2—

1988. 10

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

題字：永札達造津山市長

深田河内遺跡

—津山中核工業団地埋藏文化財発掘調査報告2—

1988. 10

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

序

深田河内遺跡は津山中核工業団地造成により発掘調査された遺跡であります。開発と文化財保護の問題は古くて新しい問題であり、常に表裏一体のものであります。幸い原因者である津山市土地開発公社の御配慮により、唯一の前方後円墳（一貫東1号墳）は緑地公園に取り入れ、現状保存措置を講ずることができました。54haという広大な津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡が点在しています。再三にわたってそれらの保存の協議がなされましたが、最終的に遺跡の保存をすると造成ができないという結論に達し、記録保存を余儀なくされたのであります。本書はその第2集にあたる報告書であります。

さて、深田河内遺跡は古墳の可能性のある遺跡として発掘調査された遺跡であります。調査区のはほぼ中央部に径5mほどのわずかな高まりが確認されました。このためトレンチによる確認調査を実施した結果、この高まりは古墳ではなく、後世の客土であることが判明しました。この時、幸いにも客土の下層に弥生時代の住居址が確認され、遺跡であることが周知となったのであります。

このように、遺跡というものは現状ではなかなか把握することが難しく、偶然の発見による場合もしばしばあります。しかし、いずれにせよこうして一遺跡を記録保存できたことは、この上ない喜びであります。

ここに、ささやかではございますが報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大な御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。次第であります。

昭和63年10月31日

津山市教育委員会
教育長 福島 祐一

例 言

1. 本書は津山中核工業団地に伴う深田河内遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡があるが、本書はその第2集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は、津山市教育委員会文化課主事行田裕美が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書では挿図に遺構の略称を用いている。略称名は次のとおりである。
SH：住居址、SB：建物址、SK：土壇、SD：溝、ST：段状遺構
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1～3・5を行田が、Ⅲ-4(1)～(4)を保田義治が、Ⅲ-4(5)を木村祐子が担当し、編集は行田があたった。
1. 遺物整理には杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面は、津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査事務所に保管している。

本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地内の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	深田河内遺跡	9
1	位置と立地	9
2	調査の経過	9
(1)	調査に至る経過	9
(2)	調査経過	9
3	調査体制	9
4	調査の記録	11
(1)	弥生時代中期の遺構と遺物	11
(2)	製鉄関連遺構と遺物	21
(3)	中世の遺構と遺物	29
(4)	その他の遺構	35
(5)	遺構に伴わない遺物	38
5	まとめ	42

挿 図 目 次

第1図	津山市位置図	1
第2図	津山中核工業団地位置図	2
第3図	第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図	2
第4図	周知の遺跡分布図	2
第5図	調査前の航空写真(北から)	3
第6図	トレンチ設定状況航空写真(南から)	3
第7図	津山中核工業団地内遺跡分布図(S=1:10,000)	4
第8図	津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図(S=1:25,000)	7
第9図	深田河内遺跡遺構配置図(S=1:600)	10
第10図	住居址1平面・断面図(S=1:80)	12
第11図	住居址1出土土器(S=1:4)	13
第12図	住居址1出土石器(S=2:3)	15
第13図	住居址2炭化材・焼土遺存状況平面図(S=1:80)	15
第14図	住居址2平面・断面図(S=1:80)	16
第15図	住居址2出土遺物(土器; S=1:4, 石器; S=1:2)	18
第16図	住居址遺構3平面・断面図(S=1:80)	19
第17図	住居址遺構3出土土器(S=1:4)	19
第18図	建物址1平面・断面図(S=1:80)	20
第19図	建物址1出土遺物(土器; S=1:4, 石器; S=1:2)	21
第20図	住居址遺構4・5平面・断面図(S=1:80)	23
第21図	住居址遺構4出土土器(1; S=1:3, 2・3; S=1:4)	24
第22図	住居址遺構5出土土器(1・2; S=1:3, 3; S=1:4)	24
第23図	段状遺構1平面・断面図(S=1:80)	25
第24図	段状遺構1出土土器(S=1:3)	26
第25図	段状遺構2平面・断面図(S=1:80)	26
第26図	段状遺構3平面・断面図(S=1:80)	27
第27図	段状遺構3鍛冶炉平面・断面図(S=1:20)	27
第28図	土壌1平面・断面図(S=1:80)	28
第29図	土壌1出土土器(1~4; S=1:3, 5; S=1:4)	28
第30図	土壌2平面・断面図(S=1:80)	28

第31図	土壌2 出土土器 (S = 1 : 3)	29
第32図	溝1・2 平面・断面図 (S = 1 : 80)	29
第33図	建物址2 平面・断面図 (S = 1 : 80)	30
第34図	建物址2 出土土器 (S = 1 : 3)	30
第35図	建物址3 平面・断面図 (S = 1 : 80)	31
第36図	建物址3 出土土器 (1~14; S = 1 : 3, 15; S = 1 : 4)	32
第37図	建物址3 出土遺物(土器; S = 1 : 4, 石器; S = 2 : 3)	33
第38図	建物址4 平面・断面図 (S = 1 : 80)	34
第39図	建物址4 出土土器 (1~9; S = 1 : 3, 10; S = 1 : 4)	35
第40図	土壌3 平面・断面図 (S = 1 : 40)	36
第41図	土壌4 平面・断面図 (S = 1 : 40)	36
第42図	土壌5 平面・断面図 (S = 1 : 40)	36
第43図	土壌6 平面・断面図 (S = 1 : 40)	37
第44図	土壌7 平面・断面図 (S = 1 : 40)	37
第45図	土壌8 平面・断面図 (S = 1 : 40)	37
第46図	土壌9 平面・断面図 (S = 1 : 40)	37
第47図	遺構に伴わない遺物(1) (S = 1 : 4)	39
第48図	遺構に伴わない遺物(2) (S = 1 : 4)	40
第49図	遺構に伴わない遺物(3) (S = 2 : 3)	41
第50図	遺構に伴わない遺物(4) (S = 1 : 3)	41
第51図	遺構に伴わない遺物(5) (S = 1 : 3)	41
第52図	遺構に伴わない遺物(6) (S = 1 : 4)	41

図 版 目 次

- 図版 1—1 住居址 1 全景（北から）
2 住居址 1 張り床除去後全景（北から）
- 図版 2—1 住居址 2 炭化材出土状況全景（北から）
2 住居址 2 炭化材出土状況
- 図版 3—1 住居址 2 炭化材除去後全景（北から）
2 住居址 1・2 全景（北から）
- 図版 4—1 住居状遺構 3 全景（北から）
2 建物址 1 全景（東から）
- 図版 5—1 住居状遺構 4・5 全景（東から）
2 住居状遺構 4・5、溝 1・2、段状遺構 2 全景（東から）
- 図版 6—1 土壌 1・2、段状遺構 3、溝 1・2 全景（東から）
2 土壌 1・2、段状遺構 3 全景（東から）
- 図版 7—1 段状遺構 1、土壌 9 全景（南から）
2 建物址 2 全景（北西から）
- 図版 8—1 建物址 3 全景（北西から）
2 建物址 4 全景（北西から）
- 図版 9—1 土壌 3（東から）
2 土壌 5（北東から）
3 土壌 6（東から）
4 土壌 7（北東から）
5 土壌 8（東から）
6 土壌 9（東から）
- 図版 10 弥生土器（1～3：住居址 1，4：住居址 2，5・6：ユウリ）
- 図版 11—1 弥生土器（ユウリ）
2 石器（1：住居址 1，5・7・8：住居址 2，6：建物址 1，2：建物址 3，3・4：ユウリ）
- 図版 12 須恵器・土師器（1～5：段状遺構 1，6：住居状遺構 5，7：住居状遺構 4）
- 図版 13 土師質土器（建物址 3）
- 図版 14 勝岡田焼・土師質土器（建物址 4）

表 目 次

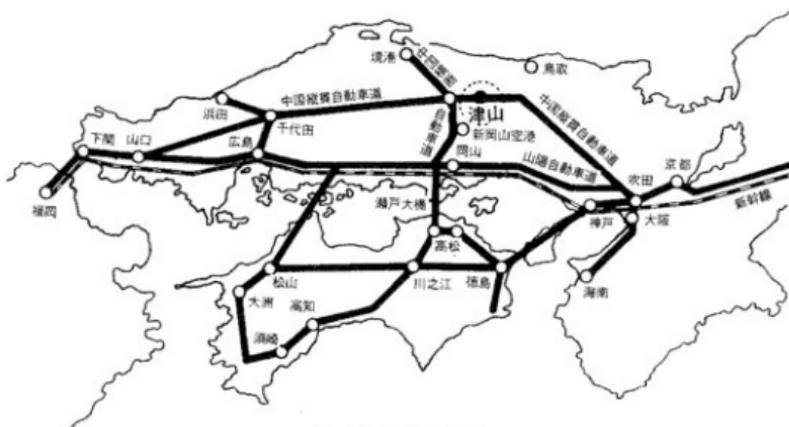
- 第 1 表 津山中核工業団地内遺跡調査一覽表
第 2 表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の建設と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業再配置政策の本質になかった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独自で対応することを決定し、



第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかった地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなった。

2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津土開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階（第3図）の第Ⅰ期工事部分約123,000㎡に相当するものである。これを受け津山市教育委員会で地形的にみて、周知の遺跡（第4図）以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレンチを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日～7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がるのが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000㎡である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることとなった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真(北から)



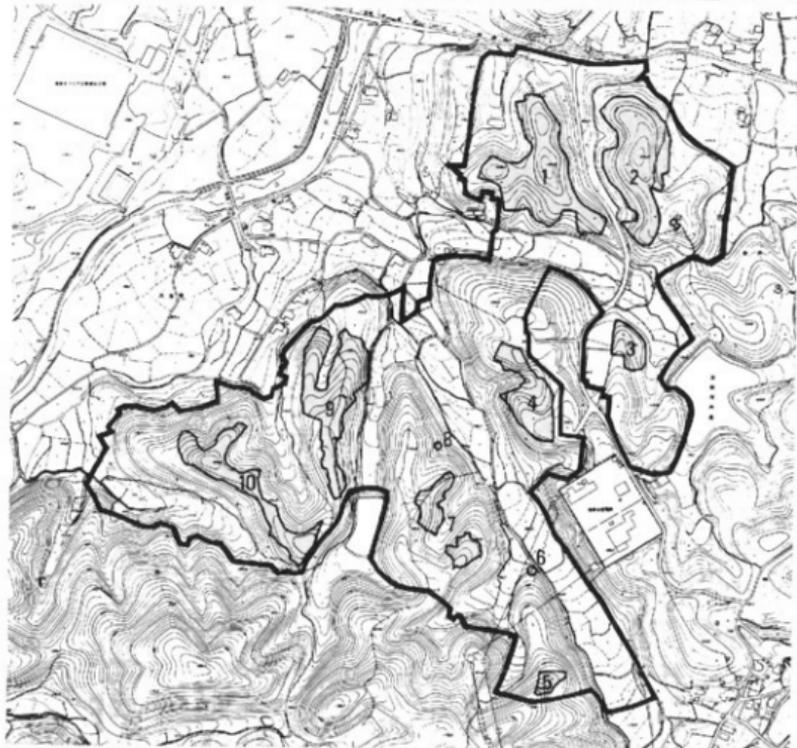
第6図 トレンチ設定状況航空写真(南から)

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畑遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

Ⅱ 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）、方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畑遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 (S = 1 : 10,000)

円墳4基(クズレ塚古墳、大畑1・2号墳、小原1号墳)を発見した。しかし、その後のトレンチによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

1 一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状遺構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状遺構、廃滓捨て場等がある。製鉄炉は後世の細地造成のため遺存していなかった。

2 一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土塚墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状遺構等により構成される。貯蔵穴は47基、土塚墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状遺構等がある。

3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状遺構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状遺構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状遺構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形竪穴住居状遺構1軒、建物址9棟、段状遺構等により構成される。奈良時代の段状遺構からは鉄滓が出土している。

5 崩れ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土塚墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である(註1)。横穴式石室を主体部に持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礎群と共に縄文土器23点が出土した。

7 崩れ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窯状遺構3基よりなる。弥生時代中期の集落は住居址3軒、長方形住居状遺構1軒、段状遺構等より構成される。

8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

保田義治『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集1988年

9 大畑遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連遺構等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。他に土壇墓も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窯状遺構1基がある。

10 小原遺跡

弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窯状遺構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴12基、段状遺構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壇、3号墳は石蓋土壇を主体部にもつ。4号墳は副溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製塩土器が伴出している。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定年度
1	一貫西遺跡	22,000㎡	S59 S61 11/26～5/26	行田 裕美	昭和64年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3
2	一貫東遺跡	20,000㎡	S60 S61 3/7～12/2	湊 哲夫	未定
3	深田河内遺跡	3,300㎡	S61 3/4～3/6、3/8～3/10	行田 裕美	昭和63年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告2
4	別所谷遺跡	9,400㎡	S61 7/26～10/23	行田 裕美	昭和65年度 6
5	崩レ塚古墳群	1,400㎡	S62 8/28～10/19	小郷 利幸	昭和64年度 4
6	クズレ塚古墳	200㎡	S62 8/4～11/6	小郷 利幸	
7	崩レ塚遺跡	5,100㎡	S62 S63 10/7～1/30	保田 義治	昭和64年度 5
8	柳谷古墳	100㎡	S62 10/9～11/12	保田 義治	昭和62年度(既刊) 1
9	大畑遺跡	18,000㎡	S61 3/4～3/6、S62 3/6～3/8、 S62 3/8～3/10、S63 3/10～3/12	行田 裕美 小郷 利幸 保田 義治	昭和65年度 7
10	小原遺跡	12,000㎡	S61 3/4～3/6、S62 3/6～3/8、 S62 3/8～3/10、S63 3/10～3/12	行田 裕美 小郷 利幸 木村 祐子	昭和65年度 8

2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130～150mの丘陵と比高差30～50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図（S=1：25,000）

- | | | |
|------------------|------------|-----------|
| 1 津山中核工業団地造成地内遺跡 | 2 野介代遺跡 | 3 押入西遺跡 |
| 4 押入飯綱神社古墳群 | 5 狐塚遺跡 | 6 能満寺古墳群 |
| 7 六ツ塚古墳群 | 8 玉淋大塚古墳 | 9 観山遺跡 |
| 10 三毛ヶ池古墳群 | 11 車塚古墳群 | 12 天神原遺跡 |
| 13 岐山古墳群 | 14 天王山古墳 | 15 和田古墳 |
| 16 飯塚古墳 | 17 美作国分尼寺跡 | 18 美作国分寺跡 |
| 19 長岐山古墳群 | 20 隠里古墳群 | 21 西吉田遺跡 |
| 22 金井別所遺跡 | 23 梶原遺跡 | 24 岡田遺跡 |

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環壕集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内においても最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上畝山古墳群が岡・丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作国分寺、同国分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(註1) 渡辺健治「津山市植木クスレ塚陶棺古墳」『古代古備』第7集1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡	
2. 野介代遺跡	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦『野介代遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
3. 押入西遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦『押入西遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4. 押入飯綱神社古墳群	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦『押入飯綱神社古墳群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973年
5. 狐塚遺跡	河本 清『狐塚遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集1974年
6. 能満寺古墳群	今井 堯『原始社会から古代国家の成立へ』『津山市史』第1巻原始・古代1972年
7. 六ツ塚古墳群	今井 堯『六ツ塚古墳群調査略報』津山市文化財調査略報3 1962年『六ツ塚古墳群』津山市文化財調査略報No.4 今井 堯『六ツ塚1号墳調査略報』津山市文化財調査略報7 1966年 近藤義郎『岡山県津山市六ツ塚古墳群』『日本考古学年報15』1967年 今井 堯『津山市川崎玉琳大塚調査報告』津山市文化財調査略報第1集1960年
8. 玉琳大塚古墳	今井 堯『津山市川崎玉琳大塚調査報告』津山市文化財調査略報第1集1960年
9. 祝山遺跡	渡 哲夫『八出祝山遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集1977年
10. 三毛ヶ池古墳群	
11. 車塚古墳群	『井田車塚古墳』『吉野山の文化財』1983年
12. 天神原遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦『天神原遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』1975年
13. 畝山古墳群	『日上畝山古墳群』津山市埋蔵文化財調査略報No.4 今井 堯・近藤義郎『群集墳の盛行』『古代の日本4』中屋・園田1970年『日上天下山古墳と畝山古墳群』『津山の文化財』1983年
14. 天王山古墳	『日上天王山古墳と畝山古墳群』『津山の文化財』1983年
15. 和田古墳	行田裕美『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集1981年
16. 飯塚古墳	『岡分寺飯塚古墳』『津山の文化財』1983年
17. 美作国分尼寺跡	渡 哲夫『美作国分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年
18. 美作国分寺跡	渡 哲夫・安川豊史・行田裕美『美作国分寺跡発掘調査報告』1980年
19. 長畝山古墳群	河本 清『美作考古学の現状と課題』『古代古備』第2集1971年 今井 堯『原始社会から古代国家の成立へ』『津山市史』第1巻原始・古代1972年 渡辺健治『美作徳里稲式石棺調査報告』『古代古備』第2集1971年
20. 隠里古墳群	渡辺健治『美作徳里稲式石棺調査報告』『古代古備』第2集1971年
21. 西吉田遺跡	行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年
22. 金井別所遺跡	行田裕美・保出善治・小野利幸『金井別所遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集1988年
23. 塚原遺跡	田中 潤・井上 弘『塚原遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1971年
24. 岡田遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊

Ⅲ 深田河内遺跡

1. 位置と立地

深田河内遺跡は岡山県津山市金井527番地他に位置する。

和氣山から北へ樹枝状に派生する丘陵は、平野部に近づくにつれ小支谷が入り込んだ複雑な地形を呈している。遺跡はこの一丘陵の先端部に位置する。遺跡の北側・東側は谷水田が奥深くまで営まれている。西側はかなり造成が行われており、旧地形をとどめていない。遺跡と北側水田との比高差は5～6mを測る。

2. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

調査区のほぼ中央部に径5mほどのわずかな高まりが確認されており、古墳の可能性があるということで調査対象範囲に入れていた。この他には埋蔵文化財は確認されていなかった。調査はまずこの高まりに東西南北の4方向にトレンチを設定し、開始した。しかし、この高まりは古墳ではなく、後世の客土であることが判明した。この時、幸いにも客土の下層に弥生時代の住居地の存在が確認され、全面調査に入ることとなった。

(2) 調査経過

昭和61年2月24日、古墳と考えられた高まりの地形測量を行った。2月26日から4月23日までの14日間、一貫西遺跡と併行して確認調査を実施した。この結果、この高まりが古墳ではないことが判明した。さらに下層より弥生時代の住居地が確認されたため、全面発掘を余儀なくされた。全面調査は5月21日より開始した。表土削ぎは事前にバックホーを借上げて実施した。5月22・23日、10mグリッドによる杭打ちを行った。調査面積は3,300m²である。調査は西側から東へと順次進めていった。遺構の密度が比較的薄く、7月30日には発掘調査すべてが終了した。

3. 調査体制

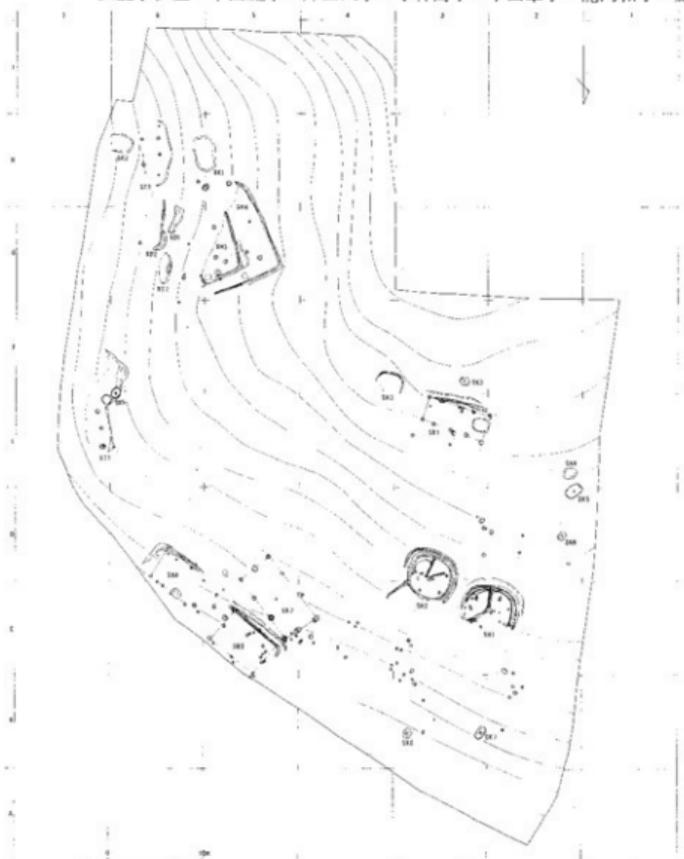
発掘調査は、津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

発掘調査主体	津山市教育委員会	教育長	福島祐一
		教育次長	藤田公男
		参事兼文化課長	内田康雄 (～S63.3.31)
		＊	須江尚志 (S63.4.1～)

調査担当
整理担当

文化係長	榎山三千穂
主 事	行田裕美
◇	◇
事務員	保田義治
埋蔵文化財調査員	木村祐子
整理員	杉山紀子・飯田和江
	野上恭子・光永純子

発掘作業員 稲垣光男・金崎 正・龍門安三・小林 信・稲垣幹子・神崎君江・安藤敬子
衣笠宇多江・下山聡子・片山久子・小林篤子・下山章子・龍門和子・藤嶋雪子



第9図 深田河内遺跡遺構配置図 (S=1:600)

4. 調査の記録

(1) 弥生時代中期の遺構と遺物

弥生時代中期の集落址は住居址2 (SH1・2)、住居状遺構1 (SH3)、建物址1 (SB1) により構成される。それらは北へ派生する尾根の先端にあり、北側の谷に面する斜面に立地する。住居址2軒は相並んで斜面のやや中腹に位置する。建物址はやや高所に位置し、住居状遺構と隣り合って位置する。弥生時代中期の土器片の分布状況もほぼこれと一致している。

住居址1 (第10図)

調査区北西部寄りの北斜面に、北側谷部に面して立地し、C-2～3区にまたがって位置する。最低2回にわたる建て替えが行われた結果、3軒の竪穴住居が重複した状況で検出されたものである。床面の中央には25cmの深さを有する中央穴があり、3軒の住居址全てが共有する。中央穴から壁体にかけて3本の床溝が走る。うち2本は南へ相並んで向かい、最も外側の壁体溝へ取り付く。もう1本は等高線の走向にほぼ直行する北東方向に走り、自然傾斜面に解消される。

3軒の住居址とも北側の壁体及び壁体溝は斜面下位のため遺存していない。

最初の竪穴住居は径約4.8mの円形で、P-1～4を主柱穴とする4本柱である。また中央穴の西隣りには80cmの深さを有する柱穴様のピットが位置する。主柱穴の配置は南側の広い台形を呈する。

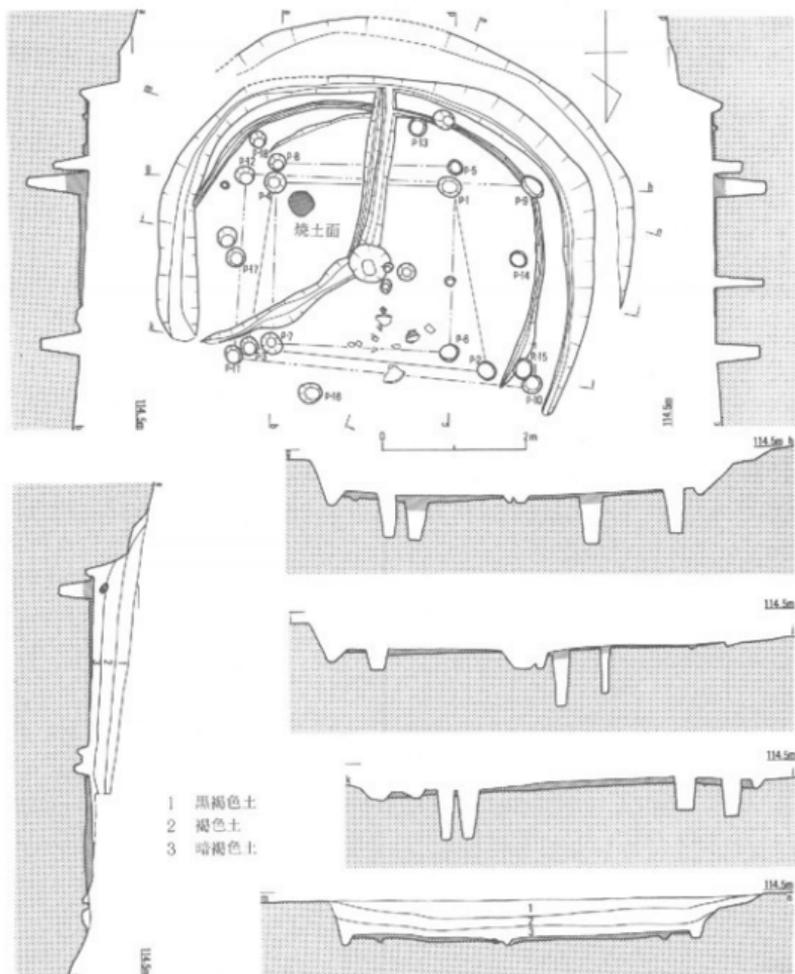
初回の建て替えはほぼ全周にわたり壁体を拡張し、全面にわたって張り床を行っている。その結果、径約5.3mを測る隅丸方形に近い円形の竪穴住居に仕上がっている。主柱穴はP-5～8であり、南側の2本は1本分更に南へ、北側の2本は1～2本分幅を狭める方向で据え直たれ、柱間距離約2.4mの正方形配置となっている。中央穴は柱穴の正方形配置の中央に位置する。この建て替えによる張り床のため、前住居の柱穴と中央穴西隣りのピットは埋められてしまっている。

次回の建て替えでは東2本は更に0.4m東へ、西2本は更に1.2m西へ主柱穴を移動している。南へのびる床溝を作り替えた可能性がある。主柱穴はP-9～12に相当し、配置は東西方向に長い長方形を呈する。

張り床上面には中央穴の南東部に焼土面が検出された。

その後、床面北側に土器が放置されたままこの住居跡は廃絶するのであるが、柱穴の操作によると、P-13～18の6本による建て替えの可能性も指摘できる。

住居址南の高位から北へかけて壁体の上位にめぐる段状施設が確認された。住居址南半を「L」字状に削平し、幅40cm程の平坦面を作り出したものである。その結果、廃絶直前の竪穴住居の

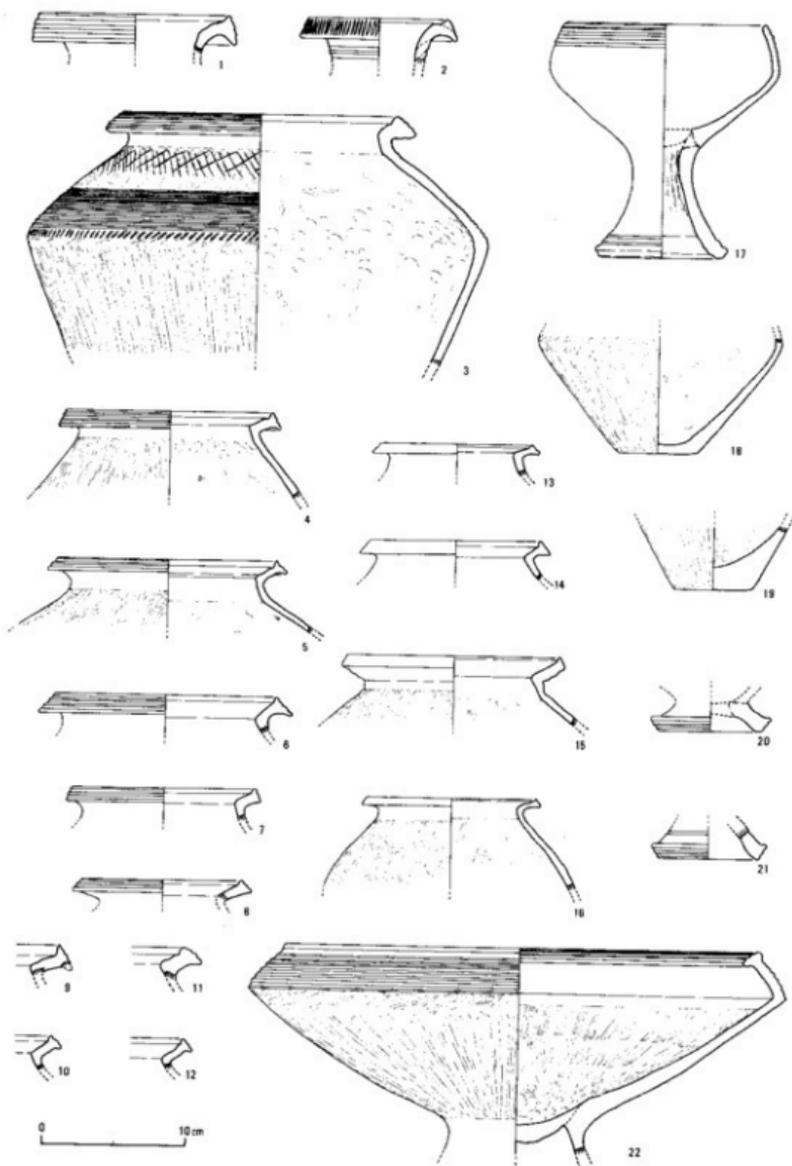


第10図 住居址1平面・断面図 (S=1:80)

掘り方の深さは40~45cmを測るものとなる。

住居址1出土土器 (第11図)

出土遺物は第10図の断面図による1層(黒褐色土)を上層、2・3層(褐色土・暗褐色土)を下層、平面図に示したものを床面上として取り上げた。図示できた22点のうち、上層出土のものは1・3・5・6・8・11・20の7点、床面上出土のものは4・22の2点で他13点は下層



第11图 住居址1出土土器 (S=1:4)

出土である。しかし、後述するが、出土遺物の間に明瞭な型式差として認められるものはないため、以下全て一括して記述することにする。図ができなかった小破片の割合もほぼ上記のものと同程度であった。

1～3は壺形土器である。1・2の口縁部は、いずれも筒状の頸部から緩やかに外反し口縁部を形成するものである。端部はやや内傾し上下に拡張するが、下方の拡張の方がより顕著である。端面は、1では凹線文3条で、2では斜方向の連続刺突文のみで加飾するという相違が認められる。頸部の凹線文は2のみに遺存している。1・2とも遺存部は内外面ともヨコナデ仕上げである。3は肩部がソロバン玉状に鋭角に張り出す器形の壺形土器である。やや肥厚し上につまみ上げた口縁部端面はかなり内傾し、5条の凹線文により加飾される。肩部上位にはヘラ描き斜格子目文が施されている。これは右下がりのヘラ描きが全周に施された後、左下がりのものが施されている。無文帯をはさんで最大径部に至るまで櫛描直線文が施される。最大径部位には斜方向の連続刺突文がめぐる。地文は最大径周辺より上位はタテ方向のハケ目、下位はヘラミガキ、内面は最大径周辺に無数の指頭圧痕が認められるが、口縁部に至るまではハケ目調整である。

4～16は壺形土器である。口縁端面に凹線文を持つものと持たないものの2者に大別できるが、型式差を反映したものではないものと考えられる。4・6～12はいずれも「く」の字状に外反した口縁部を持ち、その端部はやや内傾し、端面には3条程度の凹線文をめぐらせている。4・6・9～12は端部を上下に拡張しているが、7・8は上端をつまみ上げただけのものである。13～16は口縁端面に凹線文を持たないものであるが、13・14の様に端部を肥厚させ上方につまみ上げたものと、15・16の様にほとんど肥厚させずそのまま終わらせている2者が認められる。調整は内外面とも口縁部まではタテ方向のハケ目で、特に内面は部分的にナデ消している。

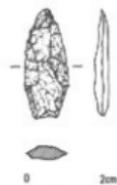
17・22は高杯形土器である。17は遺存状態が悪く調整は不明である。椀形の杯部は緩やかに内傾し口縁部にいたり、4条の凹線文が施されている。脚部は緩やかに開き、外面下位に2条の凹線文をめぐらせている。杯部と脚部との接合は円盤充填による。また外面にはわずかながら丹塗りの痕跡が認められた。22は大型高杯の杯部である。最大径を杯部上位にもち、肩はソロバン玉状に張り出す器形である。最大径部位より内傾した口縁部は、口縁端部にいたり肥厚し上下に拡張し、端面には3条の凹線文がめぐる。最大径から口縁部にいたる外面にも7条の凹線文で加飾される。外面の調整はヨコ方向のハケ目を施した後、タテ方向のヘラミガキで仕上げている。内面は最大径部にいたるまではタテ方向のハケ目である。杯部と脚部との接合は円盤充填により、内面には数多くの指頭圧痕が観察された。

18は壺形土器、19は壺形土器もしくは壺形土器の底部である。いずれも胴部下位は外面ヘラミガキで内面はタテ方向のハケ目である。底部は内面ともナデにより仕上げている。

20・21は台付壺形土器もしくは壺形土器の台部片である。ほとんど肥厚しない端部を上方につまみ上げただけのもので、その端面には凹線文を3条めぐらせている。21はその上位にもう1条の凹線文があることから、高杯形土器の脚部の可能性もある。

住居址1出土石器 (第12図)

P-9埋土中より出土したサヌカイト製平基石鏃である。両面とも両縁辺部から精緻な押圧剥離をかなり内部まで行ったもので、柳葉形に仕上げている。素材剥片の剥離方向等は不明である。長さ2.9cm、幅1.2cm、厚さ0.35cmを測る。



第12図 住居址1出土石器(S=2:3)

住居址 (第13~14図)

調査区北西部の住居址1に隣接して立地する。径4.3mの隅丸方形の竪穴住居であり、深さは60cmを測る。住居址北側の掘込みの周囲3分の2程に、幅20~25cmの段状施設がめぐり、更にその外側壁体には壁体溝がめぐる。

主柱穴は5本であり、それぞれの間隔は1.8~2.1mを測り、正五角形を呈する様に整然と並んでいる。その中心には中央穴があり、平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。その両隣りには主柱穴よりやや小さめの柱穴様ピットを検出した。しかし深さは主柱穴よりもかなり深くなる。



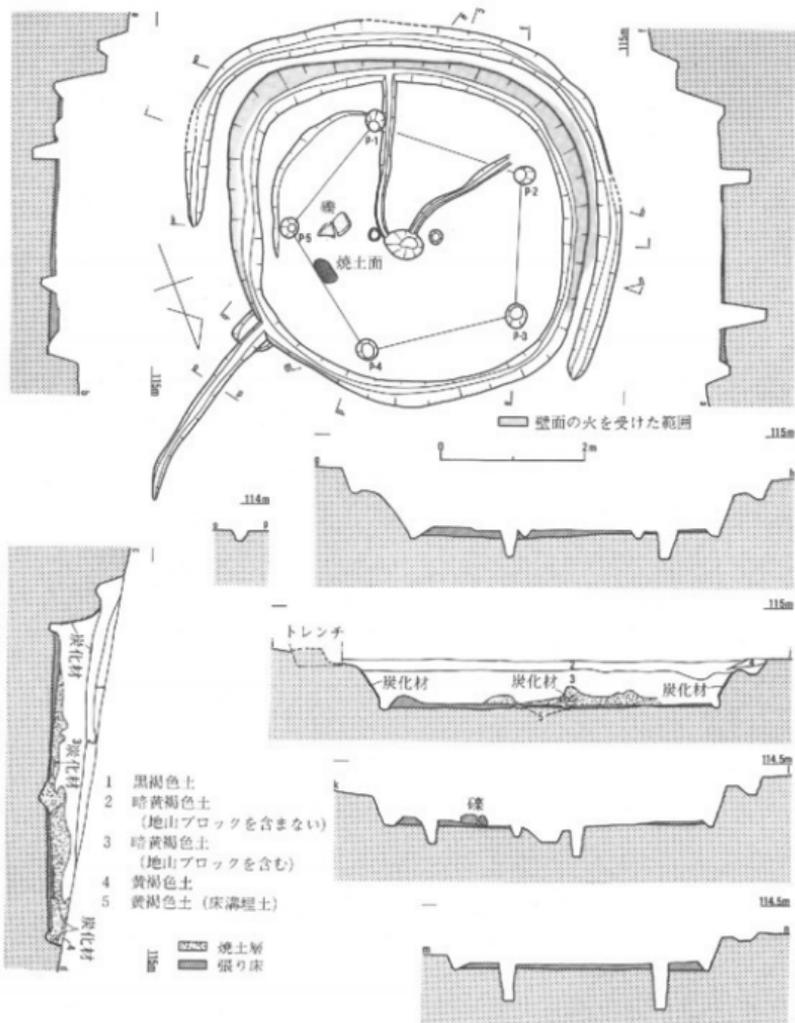
第13図 住居址2炭化材・焼土遺存状況平面図 (S=1:80)

床にはほぼ全面にわたって張り床が施されていた。厚さは10~15cmを測る。

壁体溝は一週めぐっている。床溝は2本検出された。さらに、壁体北東隅には住居外にのびる溝が取り付く。中央穴から出る床溝の1本は住居址奥の南西方向へのび、P-1と切りあい壁体溝へ取りつくものである。もう1本は西へのびるが、P-2付近で解消される。壁体北東隅から住居外へ出る溝は北東方向へ3.5m程走った後、自然傾斜により解消される。

床面には中央穴の東側とP-5との間に小児頭大の礫が検出された。また、その北側には焼土面が形成されている。

本住居址は火災によって廃棄されたものである。床面上10~40cmにわたりほぼ全面に焼土・炭化材、炭化したカヤが堆積していた。垂木等の炭化材は径10~20cmの太いものが南側壁体やや密に分布し、外側に向かって倒れ込んだ状態で検出された。その間隙にはカヤ等の炭化材が検出された。その方向は住居の中心部から放射状を呈している。焼土塊は中央穴付近と住居



第14図 住居址2平面・断面図 (S=1:80)

址西半分に多く分布する。火を受け赤変した壁体はその上端までで留まり、一部西側で段状施設平頂面にまで及ぶものの、ほとんど段状施設平頂面には赤変が認められなかった。

住居址 2 出土土器 (第15図)

第14図の断面図 1・2・4層を上層、3を下層として取り上げている。図示できた13例のうち、2・8・12は上層出土、1・3・5～7・9～11・13が下層出土である。また4は床面上より出土した。

1～3は壺形土器の頸部から肩部にかけての破片である。いずれも直立する頸部を持つものである。1は肩部から頸部にいたる屈曲部付近から上位にかけて11条の凹線文をめぐらせている。外面はタテ方向のハケ目で、頸部内面にしぼりの痕跡が認められる。2は頸部から肩部にかけての破片で、屈曲部には太くて深い断面「V」字形の凹線文をめぐらせ、その下位に櫛描波状文、更に数条の凹線文を施している。3は頸部屈曲部から最大径部にまでかけて9条の凹線文をめぐらせている。

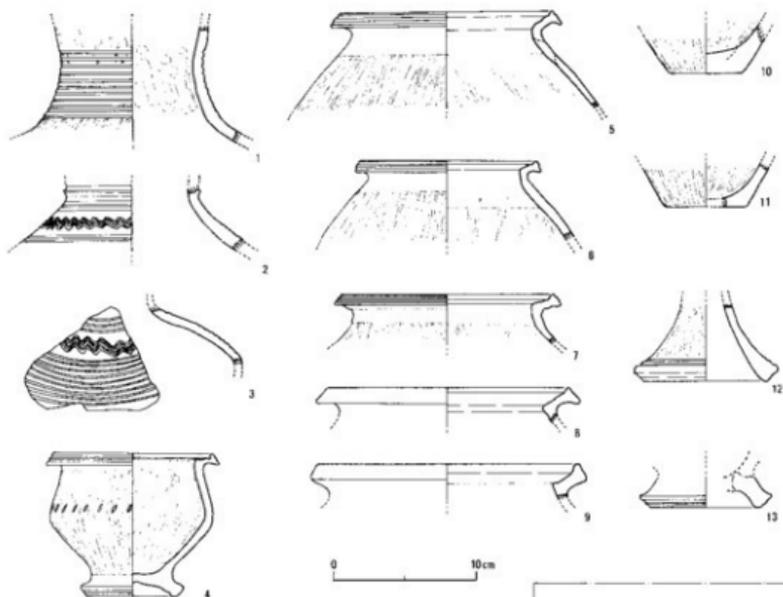
5～9は甕形土器である。その内5～7は口縁端面に数条の凹線文をめぐらせている。いずれも「く」の字状に外反する口縁部をもつが、5では内面の屈曲部に絞を成さない。6・7の口縁端部はやや内傾し、肥厚させ、上下に拡張している。特に5は下方への拡張が著しい。外面調整は、口縁部以下はすべてタテ方向のハケ目である。8・9は口縁端面に凹線文をもたないものである。「く」の字状に外反した口縁部で、端部は8で下方へ、9で上方への拡張が認められる。

10～11は壺形土器もしくは甕形土器の底部片である。すべて外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はハケ目調整である。10は成形時に底部だけ更に粘土をあてて厚く仕上げている。

12は高杯形土器の脚部である。肥厚しながら緩やかに外反し、端部上部に2条の凹線文をめぐらせている。端面には2条の凹線文が認められる。外面はタテ方向のヘラミガキである。

13は台付壺形土器もしくは甕形土器の台部片である。短く低い台部端面には凹線文が数条認められる。

4は小型台付鉢形土器である。緩やかに内傾し立ち上がった胴部上位から「く」の字状に外反し口縁部にいたる。端部は上方への拡張が著しく、端面には2条の凹線文がめぐる。胴部径やや上位には列点文が認められる。外面は上位がハケ目、下位はその後ヘラミガキ行っている。内面はヘラケズリで胴部最大径以上はその後ナテ消している。脚部は鉢部成形後張り付けている。接地面はやや幅広く作られ、端面には3条の凹線文が認められる。内外面ともヨコナテ仕上げである。

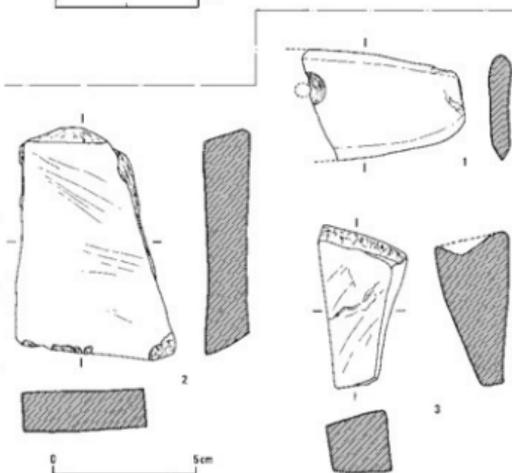


住居址2出土石器 (第15図)

1は白雲母石英片岩製磨製石庖丁片である。刃部・背部とも緩やかに弧を描く長方形を呈している。現長5.7cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmを測る。穿孔は両面から行っている。

2・3は砥石である。2は長さ8.2cm、幅5.5cm、厚さ1.6cmを測る。砥面は表裏2面であり、中央部はやや凹んでいる。断面に切断面はなく原形をとどめているものと思われる。3は長さ5.7cm、幅3.1cm、

厚さ2.6cmを測る。砥面は四周4面であり、それぞれの面とも中央部にやや凹みが認められる。削痕は斜方向に走るものである。



第15図 住居址2出土遺物 (土器:S=1:4,石器:S=1:2)

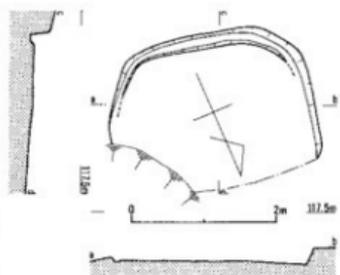
住居状遺構 3 (第16図)

通常の住居址とは規模・柱穴・中央穴の有無の点で異なるため、住居状遺構という名称を用いた。

全体図においてはSH3としたものである。

調査区北側斜面の高位F-3～4区に位置する。建物址1の東側で住居址1・2よりも高所に位置する。

緩斜面を隅丸方形に掘りくぼめたものである。山際の壁体には壁体溝が走り、東西両側壁にまではいたらない。一辺約2.9mで深さは現状で20cmを測る。床面に柱穴及び焼土面等はなんら検出されなかった。北東隅は後世の攪乱により破壊されている。また南側壁体から2.2mを測る付近で床面の平坦面は斜面の自然傾斜により解消されてしまっている。



第16図 住居状遺構3平面・断面図(S=1:80)

住居状遺構 3 出土土器 (第17図)

図示できる土器は1点である。菱形土器の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部にいたり上下に拡張する。内面屈曲部は稜をなしている。端面には2条の凹線文を施している。



第17図 住居状遺構3出土土器(S=1:4)

建物址 1 (第18図)

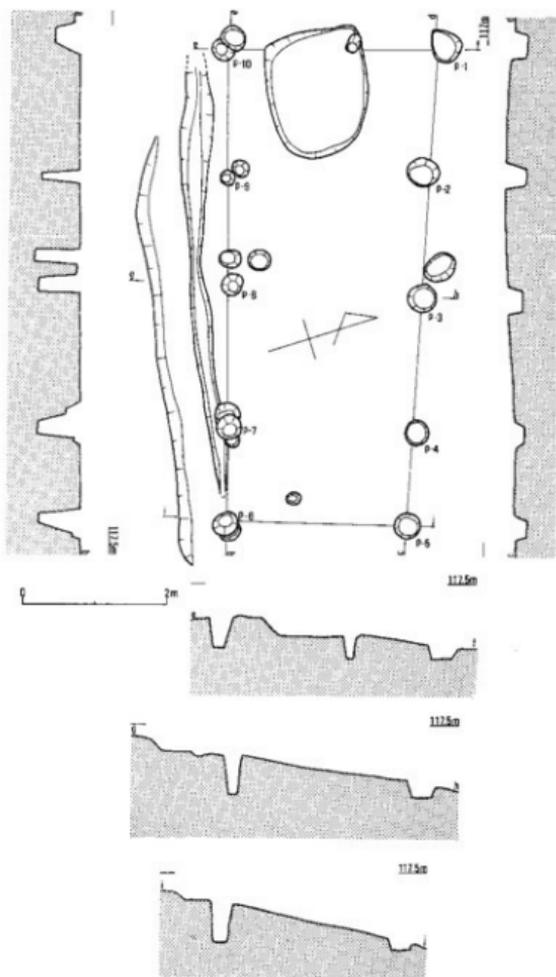
梁間1間、桁行4間の掘立柱建物である。E-3区に位置し、住居状遺構3(SH3)の西隣りで、住居址1・2の高所に立地する。

梁間は西側がやや広く2.9m、東側が2.7mを測り、桁行は6.9mである。桁行の柱間は西からそれぞれ平均1.76m、1.60m、2.00m、1.36mを測る。

南側に建物址と平行して段状施設が検出された。緩斜面を平坦に整形し建物を建築したものであると思われるが、現状の検出面は後世の土砂流出のためか、やはり緩やかな傾斜面を呈している。その北側にやや離れて浅い溝が検出されたが、P-7と切り合っており、同時併存かどうか不明である。

南側桁行の柱穴列の深さは検出面から50～60cmを測り、北側のその深さは20～30cmとやや浅い。しかしそれぞれの柱穴底のレベルは標高116.4～116.5mで揃っている。

西側梁間の中央に180×140cmの隅丸方形を呈する浅い土壇状の落ち込みが位置する。その底部に柱穴が1つ検出されたが、P-1とP-10の中間にあり、底レベルもほぼ揃うため、西側の梁間は2間であった可能性も考えられる。



第18图 建物址1平面・断面图 (S=1:80)

南側梁間の軸はN-72°-W、北側の軸はN-70°-Wを指し、建物の中軸はN-71°-Wの方向を示し、等高線走向にほぼ平行する。

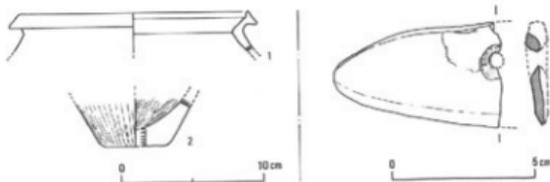
建物址1出土土器(第19図)

図示できるものは2点である。いずれも埋土中より出土した。

1は甕形土器の口縁部である。「く」の字状に外反し口縁端部にいたる。端部は上下に拡張し、端面には凹線文等は認められない。内面の屈曲部は鋭角になり稜をもつ。2は甕形土器もしくは壺形土器の底部である。底部は胴部に比べて厚く作られている。外面はハケ目調整で底部はナデている。

建物址1出土石器(第19図)

白雲母石英片岩の磨製石庖丁である。埋土中より出土した。切断面に半分だけかかっている穿孔は両面から開けられている。形状は住居址2から出土したものに比べ先細りとなっている。現長5.9cm、幅3.8cm、厚さ0.75cmを測る。表面には顕著な削痕等は認められない。



第19図 建物址1出土遺物(土器; S=1:4、石器; S=1:2)

(2) 製鉄関連遺構と遺物

6世紀末～7世紀初頭に比定される製鉄関連遺構群は住居状遺構2軒(SH4・5)、段状遺構3基(ST1～3)、溝2本(SD1・2)、土壌2基(SK1・2)より構成される。遺構群は北へ派生する尾根の東斜面に立地する。段状遺構1を除けば、全ての遺構がG～H-5～6区に集中するものである。当該時期の遺物もこの分布範囲と一致する。各遺構ごとの配置としては住居状遺構2軒が重複してもっとも高所に位置する。その下位にほぼレベルを描いて段状遺構が3基位置する。段状遺構3の上下にそれぞれ1基ずつ土壌が位置し、溝は段状遺構2と段状遺構3との間に位置する。段状遺構2、溝1・2から当該期の出土遺物はないが、他の遺構との立地関係から製鉄関連遺構群の中に一括されるものと考えられる。

住居状遺構4・5(第20図)

調査区南側G～H-5区の、東側の谷に面する斜面中位に位置する。

住居状遺構4は長辺10m以上、短辺8m以上の方形に緩斜面を削平したもので、壁体溝がめぐる。しかし、北、南及び西のコーナー部分は現状の斜面に解消されずでに遺存しておらず、

規模等は不明である。北辺沿いに一箇所焼上面が形成されている。柱穴様のピットが平坦面に数箇所確認されたが、建物址の如く整然と並ばず、不明である。

住居状遺構5は長辺6.5m以上、短辺4.8m以上の方形に緩斜面を削平したもので、壁体溝がめぐる。北西隅の壁体上位にはさらに幅60cm程の平坦面を作り出している。また、北東隅は盛土による上手を設けており、これをもって壁体とするならば短辺は4.0mを測る。やはり南から北東部にかけては斜面による自然流出のため遺存していない。床面には焼上面が北東隅に一箇所検出された。また、数箇の柱穴様のピットも床面に確認されたが、やはり建物として列をなさないものである。北面沿いの柱穴様ピットから南へ向かって床溝が走っているが、1.5m程で自然傾斜に解消されている。

住居状遺構5は火災にあっており、床面付近に2箇所の炭化物集中地点が検出された。土層断面の観察から、火災にあった住居状遺構5を埋めて新たに住居状遺構4を構築したことが判明している。このことから住居状遺構5→住居状遺構4の構築順子が認められる。

住居状遺構4出土土器(第21図)

図示できるものは3点である。

1は須恵器の杯蓋である。I1縁端部の破片であり、天井部は遺存していない。口径約10.7cmを測る。残存部分は内外面ともヨコナデ仕上げである。また口径部と天井部との境界部分には凹線がめぐる。

2は上師貫壺形土器である。口径約10.0cm、最大径約12.0cm、器高約12.0cmを測る。底部の一部は残存していない。I1縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。胴部は球形を呈し、最大径は胴部中位にある。外面は全面ハケ目調整であるが、内面はわずかにナデが認められる。

3は須恵器の壺形土器の胴下半部である。焼成はさほど良好ではなく、乳灰色を呈する。外面にはタテ方向のタタキ目文、内面にはタタキ当て具痕の同心円文が観察される。特に外面下位は遺存状態が悪く、タタキ目痕の消えている部分がある。

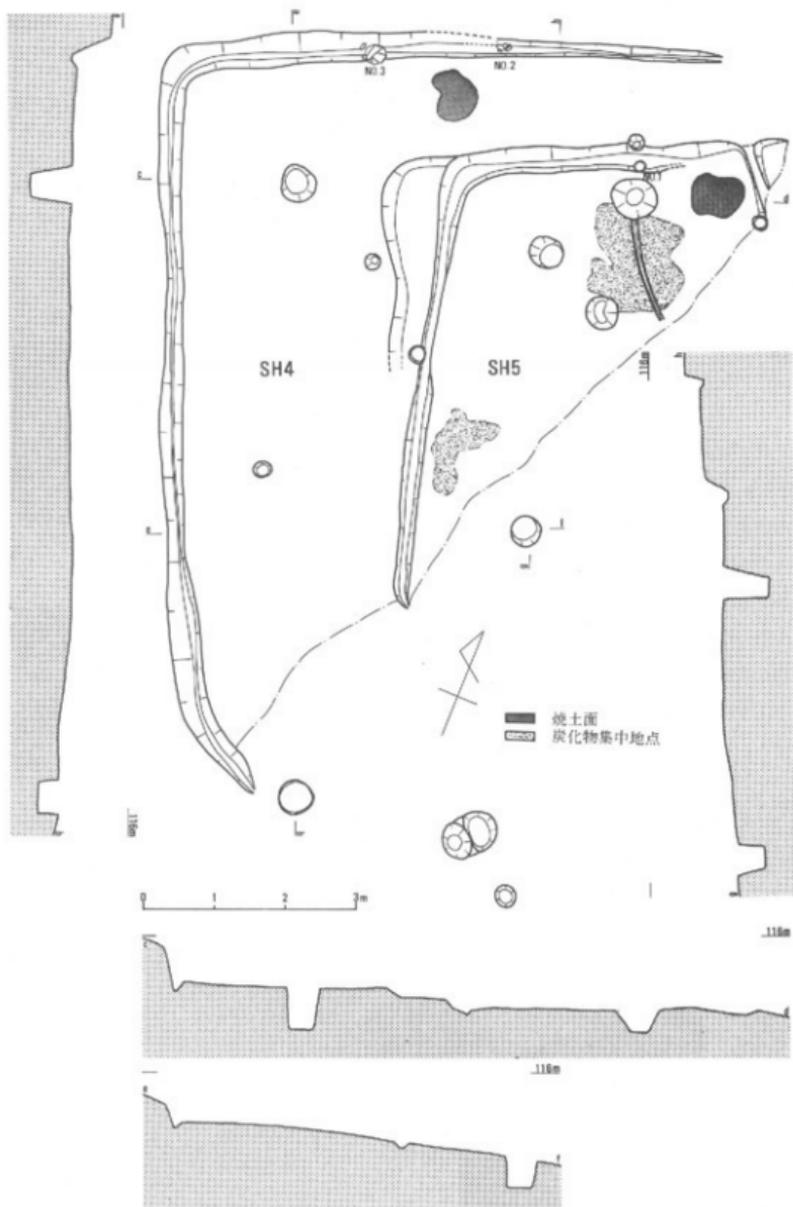
住居状遺構5出土土器(第22図)

図示できるものは3点である。

1は須恵器杯蓋である。天井部はわずかに平坦であるが、全体的に丸味をもって仕上げられている。口径部は丸くおさめている。口径約13.0cm、器高約3.8cmを測る。

2は須恵器高杯形土器の脚部片と思われる。ラッパ状に広がり、端部は上下に拡張し、端面には浅い凹線状のくぼみがめぐる。径約11.9cmを測る。

3は須恵器壺形土器のI1縁部片である。器壁は薄いものの、口径は22.2cmと大きいものであ



第20图 住居状遺構 4・5 平面・断面图 (S=1:80)

る。端部は一端丸くおさめた後、更に下方へ折り返しているものである。

段状遺構 1 (第23図)

調査区中央部最東端のE-F-6~7区にまたがって位置する。東斜面のやや低位部に立地する。

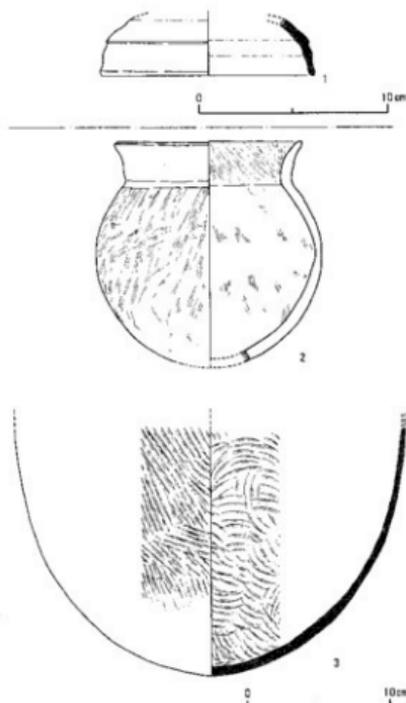
段状遺構1は弧状を呈する南半部と直線的な北半部によって構成されている。両者は別遺構の切り合いと考えられるが、埋土が同一土層のため一括して扱うことにした。

南半部は長さ6.2mを測り、緩斜面を「L」字状に削平し平坦面を作り出している。平坦面の幅は約2.0mを測り、自然斜面に解消される。さらに南側部分のみ2段掘りとなり、掘り方の斜面にもう1段の平坦面を残している。また土壌9とも切り合っており、土層観察から土壌9→段状遺構1の構築順序が認められた。

南半部から北側に向かって「く」の字状に折れまがり、北半部となる。北半部も平坦面を作り出すために緩斜面を「L」字状に削平しているが、平面形が直線的である。長さは約5.3mを測り、平坦面幅は約2.6mで自然斜面に解消される。平坦面には3本により構成される柱穴列が検出された。P-1・2は円形で55cmの深さを有する。P-3はやや大きめの方形で、中心には柱痕が確認された。底部はその部分のみ更に10cm程深く掘り下げられている。柱穴の間隔は約1.8mを測る。また柱穴列は1列のみであり、対応する東側には柱穴列は確認されなかった。

段状遺構1の全長は11.2mを測り、その軸はほぼ等高線の走向に平行する。

北半部より10点、南半部より5点の鉄滓が埋土



第21図 住居状遺構4出土土器(1;S=1:3, 2-3;S=1:4)



第22図 住居状遺構5出土土器(1-2;S=1:3, 3;S=1:4)

中より出土した。

段状遺構1出土土器 (第24図)

段状遺構1の埋土中から出土した土器で図示できるものは10点である。

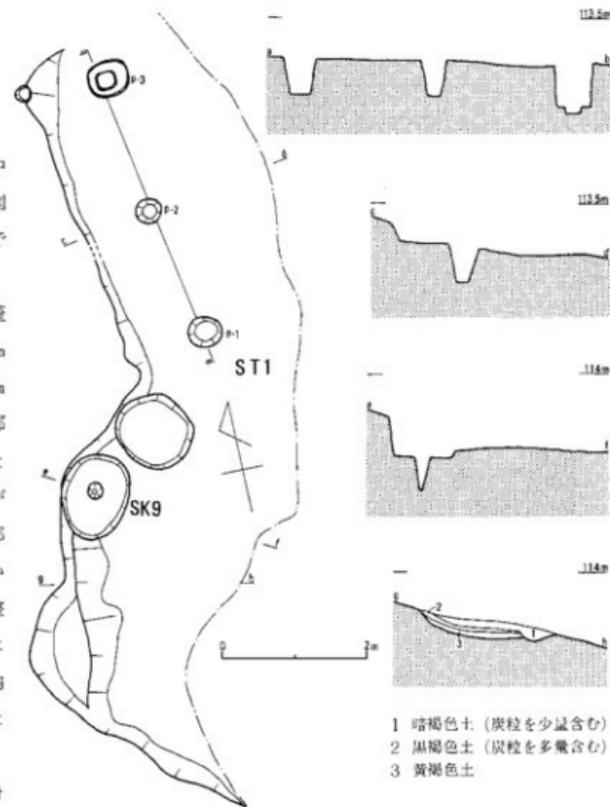
1～3は須恵器杯蓋である。口径約12.6cmを測り、器高は約4.2cmである。器形は天井部に平坦面をもつものともたないもの2者が認められる。口縁端部は丸くおさまられている。天井部外面の調整は回転ヘラケズリにより、その他の部分は内外面ともヨコナデにより仕上げている。

4～8は須恵器杯身である。口径10.2～11.4

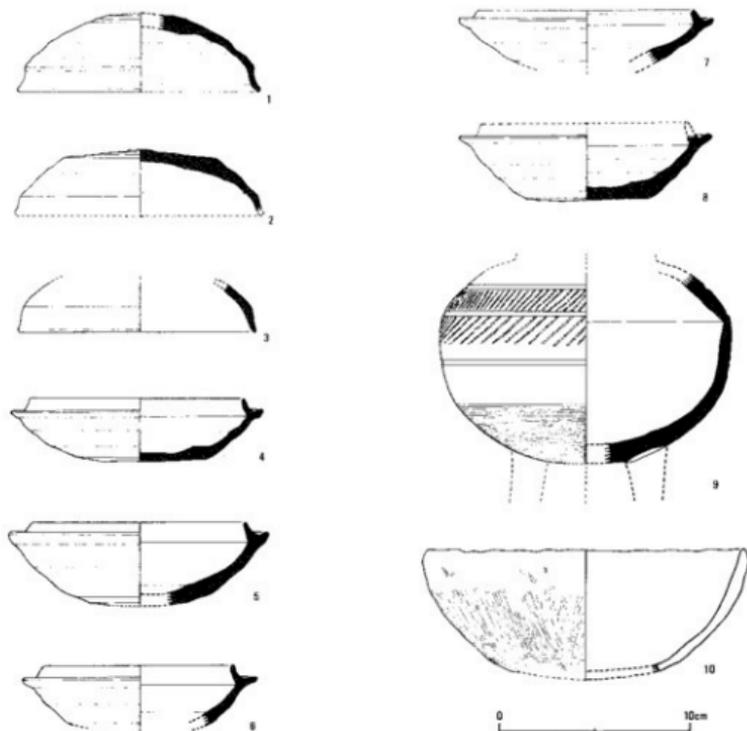
cm、最大径13.2～13.8cm、器高3.3～4.3cmを測る。器形は底部に平坦面をもつものと底部を丸く仕上げるもの2者に分かれている。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさまっている。底部外面のみ回転ヘラケズリであり、その他の部分は内外面ともヨコナデ仕上げである。

9は3脚をもつ須恵器の壺形土器と思われる。胴部は球状を呈し、上位から中位にかけて凹線文3条と2段の板状工具による連続刺突文がめぐらされている。胴部下部にはカキ目が施されており、その部分に脚部の割がれた痕跡が認められた。内面の中位やや上部に胴部下半と上半とを接合した痕跡が稜となって観察された。

10は土師器の椀形土器である。口径17.0cm、復元器高7.0cmを測る。遺存状態が悪く、調整等は不明な部分が多いが、外面はハケ目が施されるものと思われる。焼成は悪い。



第23図 段状遺構1平面・断面図 (S=1:80)

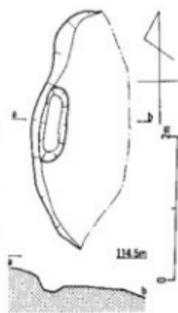


第24図 段状遺構1出土土器 (S=1:3)

段状遺構2 (第25図)

調査区東南寄りのG-6区に位置する。住居状遺構4・5の下位に等高線走向に平行して立地する。

長さ3.4mの弓状の平面形を呈しており、緩斜面を「L」字状に削平して平坦面を作り出している。中央部壁体に沿い長さ1.1m、幅0.4m、平坦面からの深さ10cm程の短い溝が検出された。平坦面の幅は約1.3mで自然傾斜に解消される。また、平坦面には柱穴、焼土面等は検出されなかった。遺物としては弥生土器が数点出土したが、図示できるものではない。



第25図 段状遺構2平面・断面図 (S=1:80)

本遺構の時期は、埋土中より弥生土器片が出土しているので、弥生時代に比定するのが妥当であろうが、埋土がより段状遺構1・3に近似しているため、あえてこの一群に所属させた。

段状遺構3 (第26～27図)

調査区南東部H-6区に位置する。土壌1の下位、土壌2の上位に立地する。

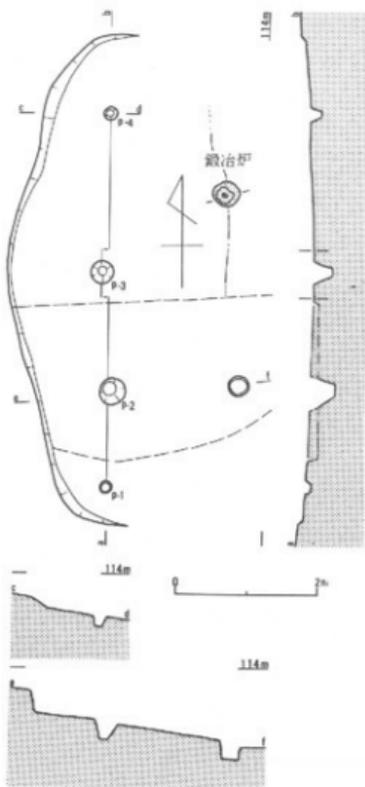
長さ7.0mの弓状の平面形を呈しており、緩斜面を「L」字状に削平して幅約3.0m程の平坦面を作り出している。平坦面は水平にはならず、後世の土砂の流出によりやや緩やかな傾斜面を呈している。平坦面にはやや壁体よりに4本から構成されている柱穴列が検出された。いずれも円形プランを呈する。両端のP-1・P-4は径約20cmとやや小さめで、深さも10～15cmと浅いものである。内側のP-2・P-3は径約30cm、深さ30～40cmとやや大きめである。柱間は北側(P-3とP-4の間)が長く、南側(P-1とP-2の間)が狭くなっており、平均すると約1.8mを測る。

平坦面の自然傾斜面に解消される付近に鍛冶炉の炉底がわずかに遺存していた。34×38cmの楕円形を呈し、厚さ約6cm程の赤褐色焼土が平坦面上に形成されている。更にその上面には黄褐色を呈した径26cmの不整形円形の焼土が形成され、その中央に炉底滓としての碗形滓が検出された。鍛冶炉であると考えられる。埋土中より5点の鉄滓が出土した。

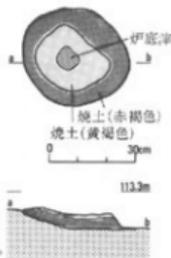
土壌1 (第28図)

調査区南東隅のH-5～6区にまたがって位置する。住居址遺構4・5の南側、段状遺構3の上位に長軸を等高線走向に平行に立地している。

平面形は3.8×2.4mの隅丸方形を呈し、24～40cm程の浅い掘り込みをもつ。底面は平坦で、3.4×1.7mを測る。埋土中より3点の鉄滓が出土した。



第26図 段状遺構3 平面・断面図(S=1:80)



第27図 段状遺構3 鍛冶炉 平面・断面図(S=1:30)

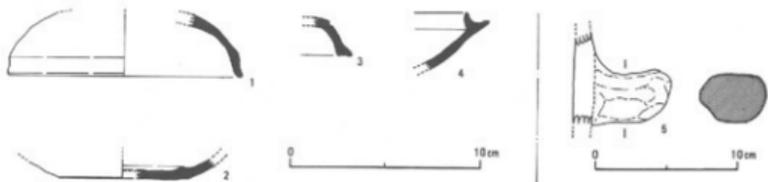
土壌1出土土器 (第29図)

図示できる遺物は5点である。

1～4は須恵器である。1・3は杯蓋の口縁端部片であり、端部の形態は1が丸くおさめるのに対し、3は平坦面を作り出している。3は天井部と口縁部の境界に凹線をめぐらせている。4は杯身である。短く内傾した立ち上がりをもつタイプである。

3・4はいずれも内外面ともナデ仕上げである。2は杯身の底部片である。わずかな平坦面をもち、回転ヘラケズリを施している。これはまた杯蓋の天井部となる可能性も考えられる。

5は土師器の把手片である。断面は楕円形を呈する。長さ約5.2cm、幅約4.4cm、厚さ約3.2cmを測る。



第29図 土壌1出土土器 (1～4; S=1:3 5; S=1:4)

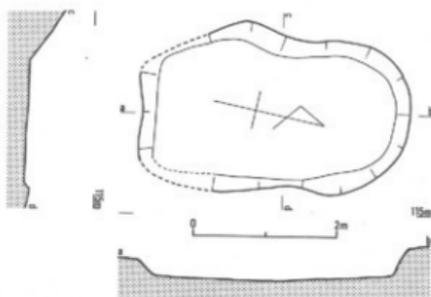
土壌2 (第30図)

調査区南東隅のH-6～7区にまたがって位置する。段状遺構3の下位に、長軸を等高線の走向に対しほぼ直行させて立地している。

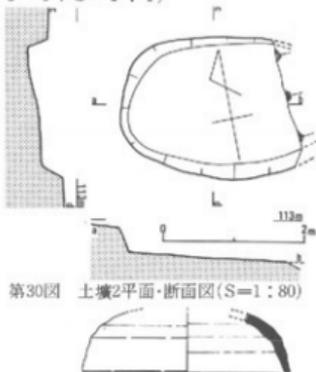
平面形は短辺2.0m、長辺2.5mを測る隅丸方形を呈する。東側部分は、削平をうけており遺存しない。掘り込みは28～40cmの深さを有する。底面は水平にはならないが、平坦に仕上げられており、1.6×2.3m以上を測る。

土壌2出土土器 (第31図)

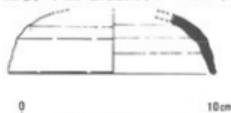
図示できる遺物は須恵器杯蓋1点である。口径約10.5cmを測り、



第28図 土壌1平面・断面図 (S=1:80)



第30図 土壌2平面・断面図 (S=1:80)



第31図 土壌2出土土器 (S=1:3)

器高は復元約4.0cmである。内外面ともヨコナデ仕上げであり、口縁端部は丸くおさめている。

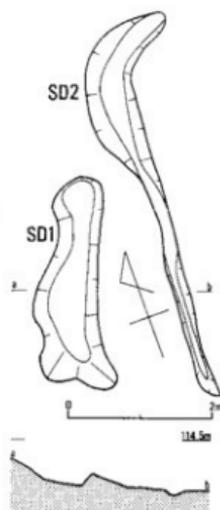
溝1・2 (第32図)

調査区南東部の遺構集中区のほぼ中央のG-6区に位置し、南に段状遺構3、北に段状遺構2、上位には住居状遺構4・5が立地する。等高線の走向に平行し、上位に溝1、下位に溝2が検出された。

溝1は長さ3.0m、幅0.8mで深さ約16cmと浅いものである。等高線走向と同様にやや弧状に折れ曲がる。

溝2は長さ5.6m、深さ約25cmとやはり浅いものである。幅は北側がやや広く0.7m、南側は0.2mを測る。これもやや弧状に曲がるものである。溝2は形態から段状遺構の壁体溝の可能性も考えられる。

出上遺物はない。



第32図 溝1・2平面・断面図(S=1:40)

(3) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は建物址3棟により構成される。立地は北東部の斜面中位から下位にかけてである。建物址3と4は主軸をほぼ同一方向にとっており、同時併存の可能性が指摘される。それに対し、建物址2はやや主軸を変えており、また部分的に重なっていることから、建物址3・4とは時期を別にするものである。よって、中世には大きく分けて2時期の集落が営まれていたものと考えられる。

建物址2 (第33図)

調査区北東部のC-4、C-D-5区に位置する。桁行方向が北東に直した斜面低位部に立地する。梁間2間、桁行3間の掘立柱建物である。主軸はN-38°-Wを指し等高線の走向に対してかなり斜行する。そのため南隅のP-1がもっとも高い位置に、北隅のP-6が最も低い位置にあり、その底部のレベルの差は約1mを測る。

梁間は南側で3.8m、北側で4.0mを測り、桁行は西側で8.4m、東側で8.0mを測る。南側桁行2間分(P-1~P-3とP-7~P-9)の軸に対し、北側の1間分(P-3~P-4とP-6~P-7)の軸は3~6°東に振っており、そのためP-6とP-7の柱間が2.5mであるのに対し、P-4とP-3の柱間がやや長く3.1mとなっている。柱穴は概して円形であるが、南側柱穴が径30cm前後であるのに対し、北側はやや大きく径60cm前後を測る。柱穴の深さ及び底部のレベルはまちまちであり、断面形態にも統一性は認められない。P-6とP-7に

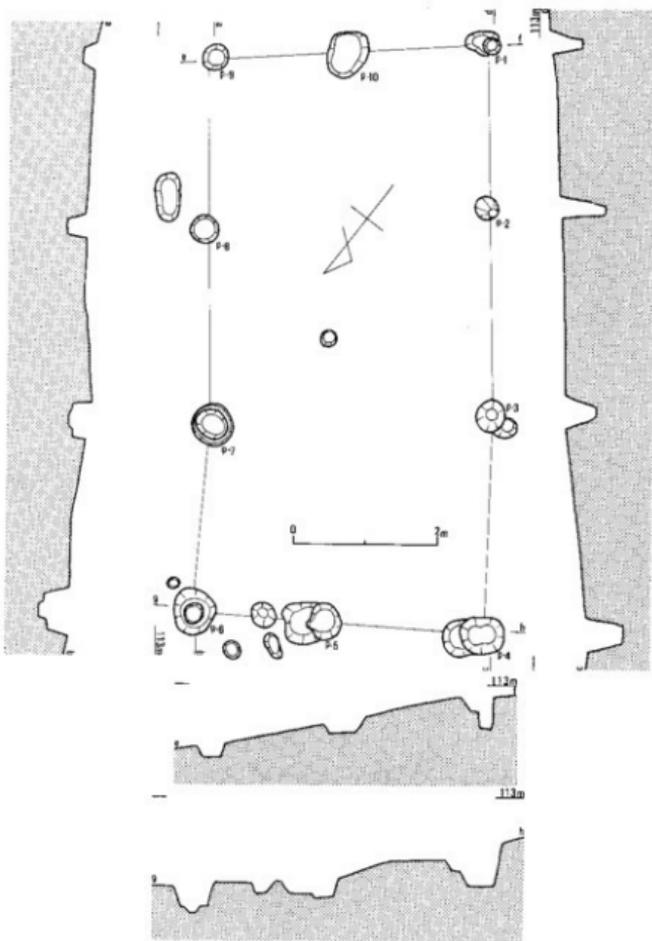
は柱痕が確認されている。

建物の区画外に数個の小ピットが検出されたが、建物址との共存関係については不明である。

建物址2出土土器 (第34図)

図示できる遺物はP-6出土の1点である。口径約18cmを測る。須恵器の口縁部であるが器種は不明である。頸部はやや外反し、口縁端部はわずかに外側に拡張し、その上部に平坦面を持っている。頸部より下位は遺存しておらず不明であるが、わず

かに外側へ張り出す痕跡がその断面に認められた。本遺物の所属時期は不明であるが、建物址3・4の立地関係からみて同時期と考えたい。



第33図 建物址2平面・断面図 (S=1:80)

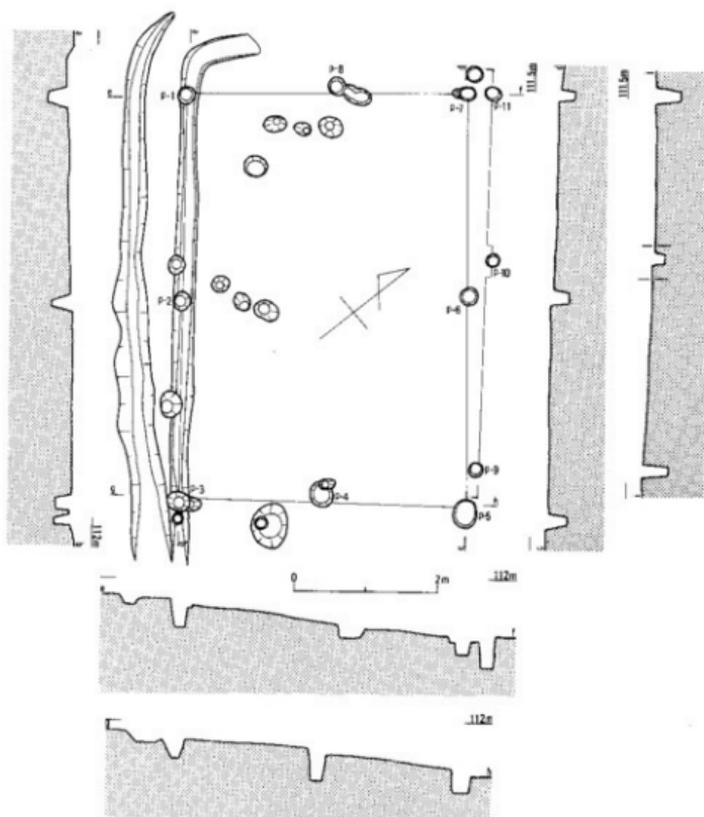


第34図 建物址2出土土器 (S=1:3)

建物址 3 (第35図)

調査区北東部のC-5区に位置し、建物址2よりも下位に立地する。梁間2間、桁行2間の掘立柱建物である。梁間は西側で3.9m、東側で4.0mを測る。また、桁行は北側で6.0m、南側で5.8mであり、梁間の柱間よりも桁行の柱間の方が長くなっている。柱穴の平面形は直径ほぼ20cm前後の円形であり、深さは検出面から20~30cm程である。検出面の地形が北東に緩やかな斜面であるため、柱穴の底部のレベルは揃わない。

建物の主軸はN-51°-Wを指し、等高線の走向に対してやや北に振るもののほぼ平行する。南側桁行の軸線に平行に2本の溝が検出された。1本は南側桁行の30~40cm程外側を走るも



第35図 建物址3平面・断面図 (S=1:80)

のである。もう1本は南側桁行に重なるように走るものである。2本の溝は建物址南隅P-3付近で両方の溝の内側を接して解消する。また、両溝とも西側隅で内側のものはほぼ直角に、外側のものはやや緩く谷に向かってカーブしている。

北側の桁行に沿って3本からなる柱穴列を検出した(P-9~P-11)。これが別の建物址の桁行となる可能性もあるが、対応する桁行は明瞭に検出できなかった。主軸はN-49°-Wを示し、建物址3の主軸とは2°程北へ振るものである。

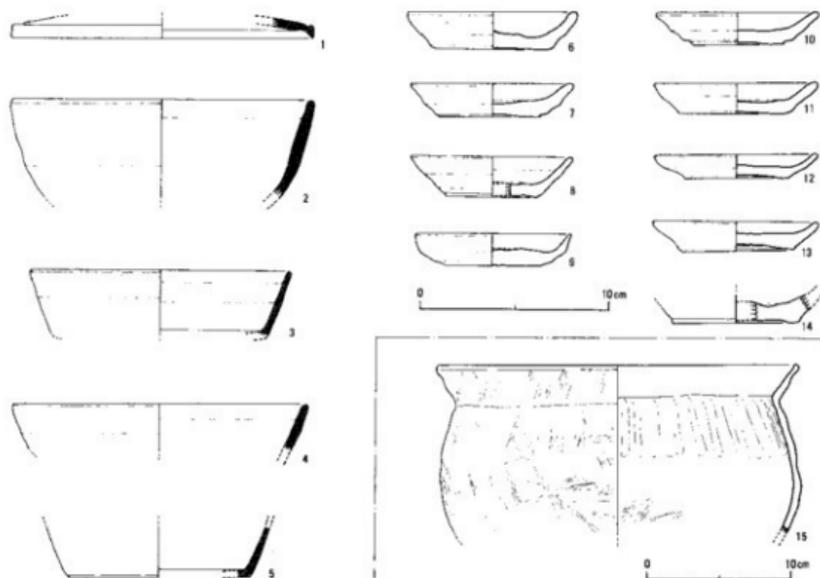
建物址3出土土器 (第36図)

図示できる遺物は15点である。

1は須恵器の蓋端部片である。口径約15.7cmを測る。端部は上下に拡張し、端面には浅い凹みが一周している。また端部上面にも凹みが認められる。

2は勝間田焼である。体部が碗状になるタイプで、口径約15.8cmを測る。内外面には明瞭な水引き痕跡が認められ、端部は丸くおさめている。4も同様の勝間田焼である。3・5は平坦な底部からほぼ直線的に口縁部にいたるタイプの須恵器である。

6~14は土師質の小皿である。色調はいずれも暗赤褐色を呈する。内外面とも水引きの痕跡が認められる。全体的にやや肉厚に仕上げられている。底部外面はヘラ切りによるもの(12・



第36図 建物址3出土土器 (1~14; S=1:3, 15; S=1:4)

13) と回転切りによるもの(6~11・14)の2者がある。口径約9.0cm、器高は1.5~2.2cmを測る。

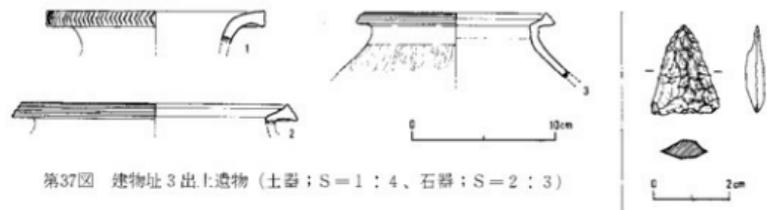
15は土師質の甕形土器である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめている。最大径部は胴部のやや上位にあるものと考えられる。外面調整はタテもしくはナナメ方向のハケ目であり、内面の一部にも認められる。内面調整は屈曲部直下には指によるナデ上げが認められる。口縁端部と口縁内面についてはヨコナデ仕上げである。口径・最大径とも約25.2cmを測る。

建物址3出土弥生遺物(第37図)

建物址3の埋上中より弥生土器と石器が出土している。柱穴中からは中世の遺物が出土していることから、これらは他遺構からの流入品と考えられる。

1~3は弥生土器である。1は壺形土器の口縁部片である。直立する頸部から外反し、やや肥厚した端部にいたる。端面には「く」の字様の板状工具による連続刺突文がめぐる。2・3は甕形土器である。いずれも「く」の字状に外反し口縁部にいたるもので、端面にはいずれも数条の凹線文がめぐる。

石器はサヌカイト製の平基石鏃である。長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.45cmを測る。やや肉厚で、縁部からの精緻な小刻離がほどこされており、素材剥片の剥離方向等は不明である。



第37図 建物址3出土遺物(土器; S=1:4、石器; S=2:3)

建物址4(第38図)

調査区北東部C~D-6区に位置し、建物址3の南東部隣りで、かなり斜面下位に立地する。梁間1間、桁行2間以上の掘立柱建物である。

梁間は東側のみ検出されており、3.6mを測る。桁行は南側で3.5m以上を測り、柱間は平均175cmである。北側桁行は1間しか確認できなかった。柱穴は径30~40cmの円形プランで、深さはまちまちである。しかし底レベルは南側桁行の柱穴で標高111.9m程度、北側桁行の柱穴で111.3m程度に揃えてある。柱穴内には小児頭大から拳大の礎の入っているのが多く認められた。

建物の上軸はN-53°-Wを指し、等高線の走向に対してほぼ平行である。しかし梁間は桁行と直行せず、P-1の柱穴を基点として梁間と桁行の成す角度は約87°となっている。

南側桁行に沿って溝が検出された。南隅のP-1付近ではほぼ直角に東へ曲がり、自然傾斜に解消される。その角付近からは礫とともに土器片が多数検出されている。その溝の取り囲む内側には非常に硬くしまった床面が形成され、さらに、径約50cmを測る焼土面が検出された。建物址の柱穴配置と溝をもつ平坦面は多少ずれるが、同一遺構と考えられる。

建物址4の区画内外には数箇の小ピットが検出されているが、建物址4との共存関係については不明である。

建物址4出土土器（第39図）

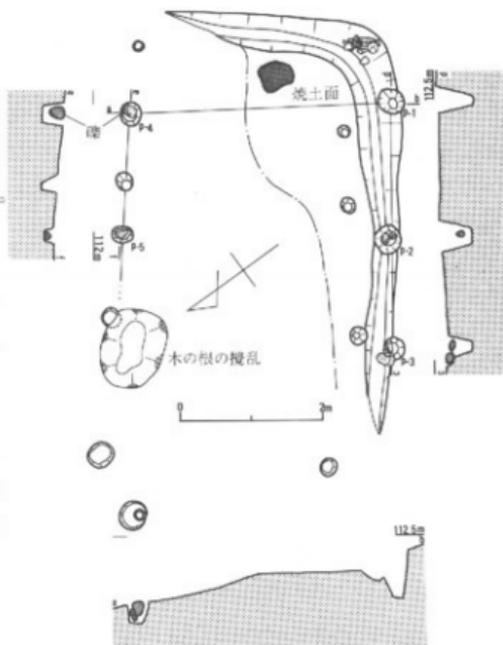
図示できる土器は10点である。

1～5、8・9は勝間田焼の椀形土器である。底部は概して平坦で糸切りである。胴部は緩やかに外反しながら口縁部にいたり、口縁端部は丸くおさめている。調整は水引き仕上げであり、ユビによる痕跡が胴部全般にわたり認められた。また重ね焼きの際の色調の変化が口縁部直下に認められる（第39図のトーン部分）。口径12.3～15.3cm、器高4.5～6.3cmを測る。

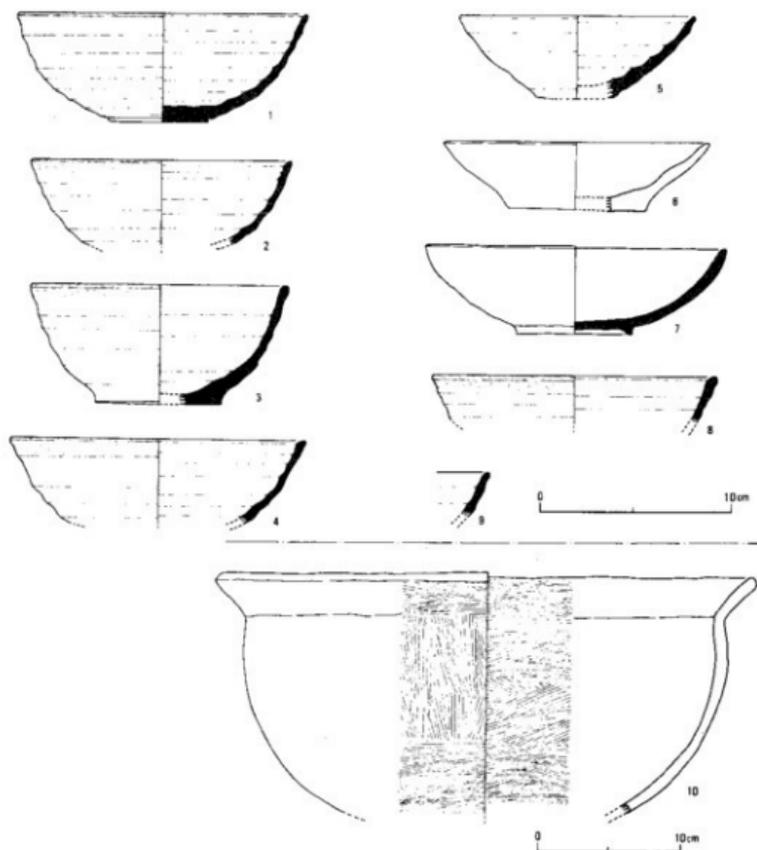
6は土師質の椀形土器である。勝間田焼に比べると、胴部がやや直線的に外反している。口径13.8cm、器高3.6cmを測る。杯部の調整は水引きによる。底部には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。

7は須恵質の台付椀形土器である。乳白色で須恵質ではあるが、焼成は不良である。調整は水引きによると考えられるが、勝間田焼に認められるようなユビナデ痕跡は認められない。底部には径約6.0cmを測る高台が貼り付けられている。口径15.6cm、器高3.5cmを測る。

10は土師質の甕形土器である。口径が最大径であり38.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反している。胴部は半球状を呈しており、屈曲部から徐々に底部へと向かってゆく。底部の破片は出土しておらず、形態等は不明であるが、恐らく丸底であるものと考えられる。内外面とも粗いハケ目仕上げであるが、口縁部外面と底部付近及び内面はヨコ方向の、胴部外面中位はタテ方向のハケ目である。



第38図 建物址4平面・断面図（S=1：80）



第39図 建物址4出土土器 (1~9; S=1:3, 10; S=1:4)

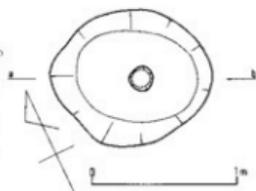
(4) その他の遺構

土壌3 (第40図)

調査区中央西寄りでF-3区に位置し、建物址1の南側やや高所に立地する。長径115cm、短径96cmの楕円形のプランを呈し、深さは現状で80~100cmを測る。底面のレベルは標高116.4mである。底面ほぼ中央に径16cm、深さ32cmのピットが検出された。長軸は等高線走向に対しかなり斜行するものである。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

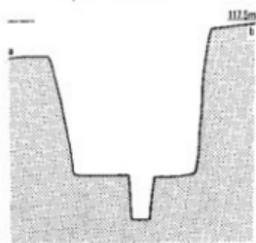
土壌4 (第41図)

調査区最西端のE-2区に位置し、斜面やや上位に立地する。長径150cm、短径116cmの隅丸方形に近い楕円形を呈する平面形に、52~60cmの深さを有する。底面のレベルは標高115.5mを測る。長軸は等高線の走向とはやや南に振るものの、ほぼ平行である。出土遺物はなく、時期は不明である。



土壌5 (第42図)

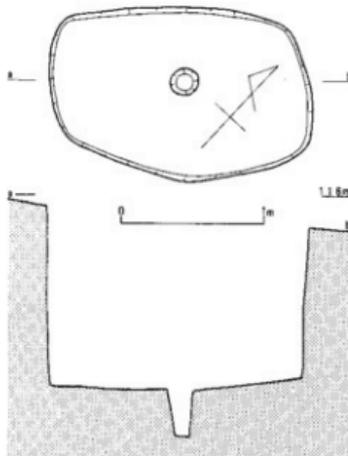
調査区最西端のD-2区に位置し、土壌4とは70cm北へ離れたやや斜面下位に立地する。長径184cm、短径124cmの隅丸方形の平面プランで、検出面からの掘り込みは104~108cmと深い。底面のレベルは標高114.7mである。底面の中央には径20cm、深さ20cmのピットが1つ検出された。長軸は等高線走向とはやや斜行する。出土遺物はなく、また他遺構との切り合いもないため、所属時期は不明である。



第40図 土壌3平面・断面図(S=1:40)

土壌6 (第43図)

調査区最西端D-2区に位置し、土壌5とは3.7m程北へ離れた斜面下位に立地する。長径104cm、短径74cmを測る。隅丸長方形に近い楕円形プランで、深さは現状から80~90cmを



有する。底面

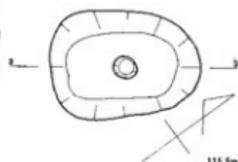
第41図 土壌4平面・断面図(S=1:40)のレベルは標高114.4mである。底面には中央に径16cm、深さ26cmのピットが1つ検出された。長軸は等高線走向に対して斜行する。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

土壌7 (第44図)

調査区北西隅のB-3区に位置し、斜面かなり下位に立地している。長径146cm、短径84cmを測る隅

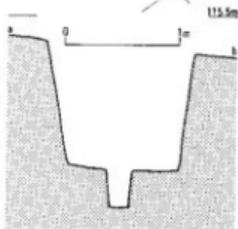
第42図 土壌5平面・断面図(S=1:40)

丸方形プランで、検出面からの深さは60~84cmを有する。底面のレベルは標高約110.9cmである。底面中央には径24cm、深さ40cmのビットが検出された。長軸は等高線の走向に対してほぼ直行する。遺物が出土しておらず、他遺構との関連も不明であるため、時期の比定は不可能である。



土壌 8 (第45図)

調査区北端のB-3区に位置し、かなり斜南下位で土壌7とは約8.5m東に立地する。長径112cm、短径86cmを測る楕円形のプランを有し、検出面からの深さは84~100cmを測る。底面のレベルは標高約110mである。底面はかなり小さいが、その中央には径18cm、深さ20cmのビットが1つ確認された。長軸は等高線の走向に対してはやや西に振るものの、ほぼ直行しているとみてよい。出土遺物はなく、所属時期等は不明である。

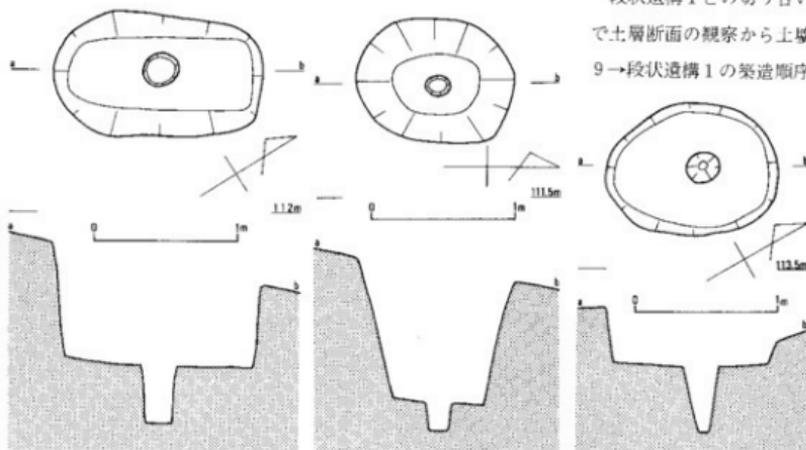


第45図 土壌8平面・断面図(S=1:40)

土壌 9 (第46図)

調査区東端のE-F-5区に位置し、段状遺構1と切り合って検出された。長径120cm、短径92cmを測る楕円形のプランで、段状遺構床面からの深さは20~40cmと浅い。底面のレベルは標高112.8m程である。底面中央には径25cmで48cmの深さを有するビットが検出された。

段状遺構1との切り合い
で土層断面の観察から土壌
9→段状遺構1の築造順序



第44図 土壌7平面・断面図(S=1:40)

第45図 土壌8平面・断面図(S=1:40)

第46図 土壌9平面・断面図(S=1:40)

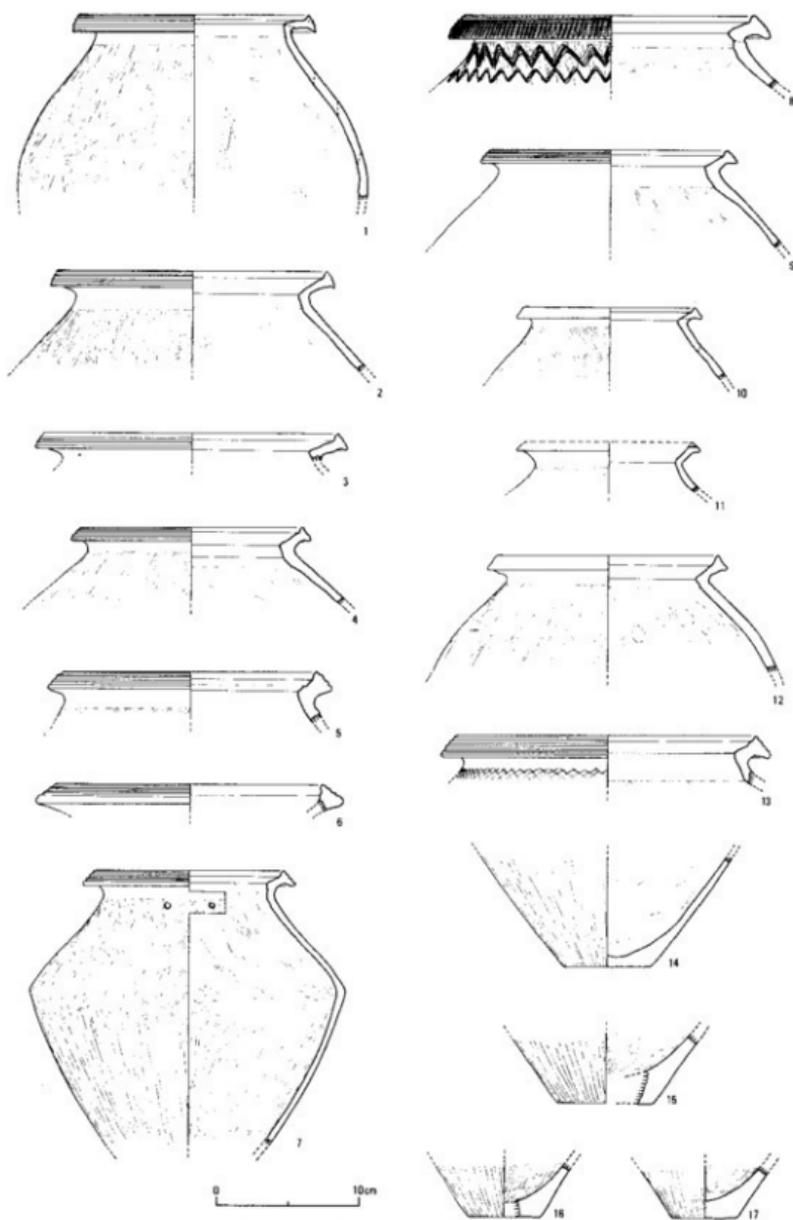
が判明した。しかし、土壌9の埋土中からの出土遺物はなく、土壌9の所属時期は不明である。

(5) 遺構に伴わない遺物

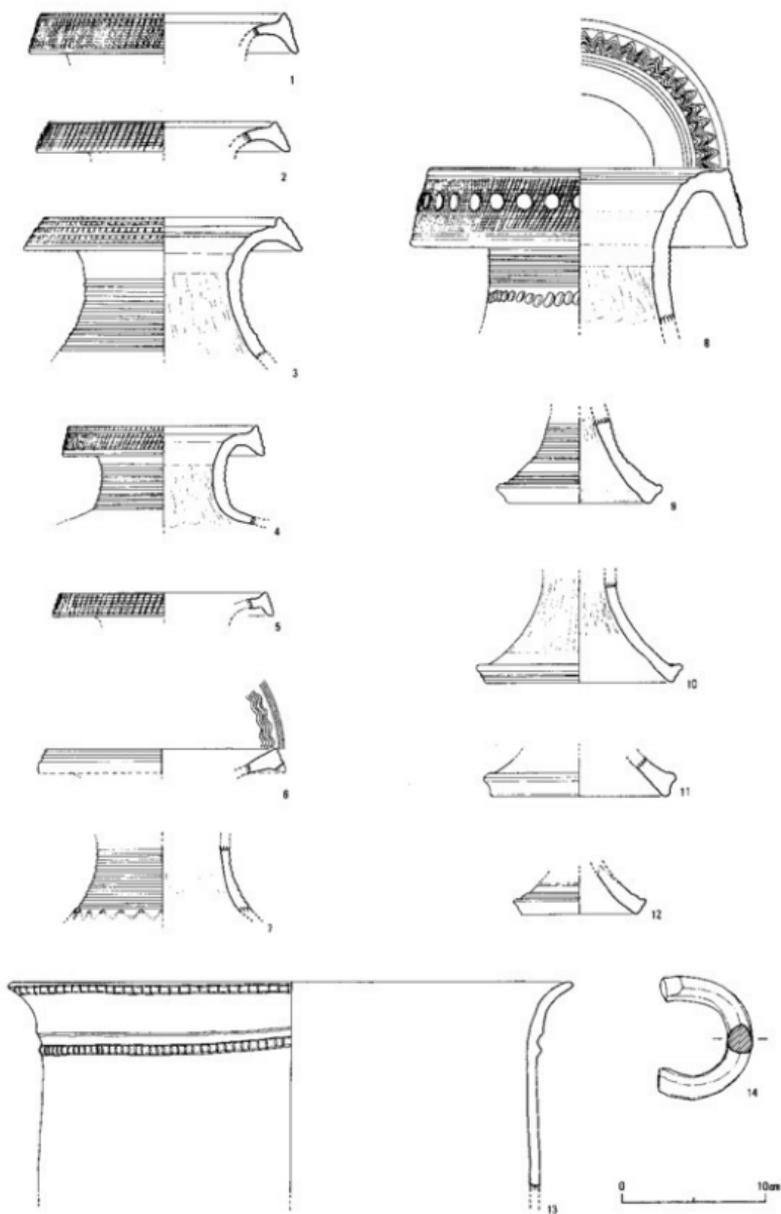
第47・48図には弥生土器をあげた。第47図の1～12は、甕形土器である。いずれも頸部から「J」字状に外反し、口縁部に至る形状を呈する。口縁端部の形状は、1～4・7～12のように上下に若干拡張するものと、5・6のようにやや肥厚するものとに大別できる。さらに端面には、凹線文を施すもの(1～9)と、ナデで仕上げたもの(10～12)の2者が認められる。8の口縁端面には、凹線文の後、斜方向の連続刻目文をめぐらせている。また頸部は、タテ方向のハケ目の後、櫛描波状文で加飾している。これらの甕形土器は原則として、胴部外面上半はタテ方向のハケ目で、下半はタテ方向のヘラミガキで仕上げている。胴部内面は、ハケ目を施した後ナデで仕上げているが、部分的にハケ目が残っている様子が観察される。7は、胴部が強く張り出す器形を呈する。頸部には2ヶ所に穿孔がなされている。外面にはススの付着が認められた。13は壺形土器である。口縁端部は下方にやや拡張きみで、端面には凹線文を施す。頸部には、ヘラ描き斜倚了目文をめぐらせている。14～17は、壺形土器あるいは甕形土器の底部の破片である。6は、壺形土器の口縁部の可能性も考えられる。また8は、壺形土器に多用される櫛描波状文を有するが、器形を重視して甕形土器に分類した。

第48図の1～8は壺形土器である。概ね、筒状の頸部に数条の凹線文を有し、頸部から緩やかに外反して口縁部に至る形状を呈する。1～5の口縁端部は、やや内傾し上下に拡張する。端面には凹線文の後、斜方向の連続刻目文を施している。これに対し、6の口縁端部はわずかに肥厚させる程度で小さめ、端面にも凹線文が施されるのみである。口縁端部内面には、櫛描波状文が一周している。8は、口縁部が大きく下方に垂れ下がる大型の壺形土器である。口縁端面は、凹線文・刻目文を施した後、さらに円形浮文で加飾している。水平面には、櫛描波状文が一周する。頸部凹線文下位には、指による連続刺突文が認められる。3・4・7・8の頸部内面には、いずれもしぼり痕が認められる。9～12は高杯形土器の脚部である。いずれも脚端部は、やや肥厚して斜め上方に立ち上がる。外面に凹線文を施すもの(9・12)と、そうでないもの(10・11)の2者に大別できる。14は鉢形土器の把手である。13は、筒状の胴部から緩やかに外反しながら口縁部に至る甕形土器である。口縁端部外面と、その下位には爪による連続刺突文をめぐらせている。下位の刺突文に接して、上方に指ナデによるものと思われる浅い凹みがある。胎土には1～2mm大の砂粒を多量に含み、色調は淡褐色を呈する。類別は明らかではないが、弥生時代前期に属するものと考えられる。

第49図には弥生時代の石器をあげた。1は、長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測るサヌカイト製の凹基式石鏃である。脚部左位を欠く。2は長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る凹

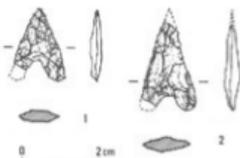


第47図 遺構に伴わない遺物(1) (S=1:4)



第48図 遺構に伴わない遺物(2) (S=1:4)

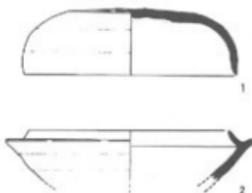
基式のサヌカイト製石鏃である。先端部と脚部左位を欠損している。1・2とも剝離は表裏両側縁から行われ、ほぼ中央で切り合いわずかな稜を形成する。



第49図 遺構に伴わない遺物3 (S=2:3)

第50・51・52図には須恵器・勝間田焼をあげた。第50図の1は口縁部径約11cm、器高3.5cmを測る杯蓋である。天井部はほぼ平坦で、鋭くカーブしながら口縁部にいたる。口縁部はやや尖り気味に

丸くおさめて
いる。2は杯
身である。受
け部はそのまま
斜め上向に



引き出され、

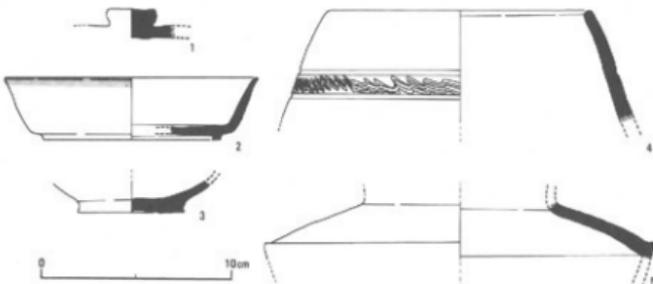
第50図 遺構に伴わない遺物4 (S=1:3)

端部は丸くおさめている。立ち上がり部は内傾し短い。端部は尖り気味に丸くおさめている。

3は平瓶である。口頸部はやや外開きに立ち上がる。端部は欠損している。口頸部の中程には、2条の沈線をめぐらせている。体部はわずかに残存するのみであるが、外面に3本の沈線が観察される。



第51図の1
は杯蓋である。
大半は欠損し
ているが、天
井部中心には
径2.5cm大の
碁石状のつま
みが付く。2
は口径約13cm



第51図 遺構に伴わない遺物5 (S=1:3)

の高台付杯である。底部から外傾しながら立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部はやや外方につまみ出し、端部は丸くおさめている。口縁部外面には、重ね焼きの痕跡が認められる。3は勝間田焼の椀の底部である。底面には回転糸切り

第52図 遺構に伴わない遺物6 (S=1:4)

痕が認められる。4は器種不明である。口径約14cmを測る。内傾しながら口縁部にいたる外面には2条の沈線がめぐり、その間を櫛描波状文で加飾している。5は広口蓋の頸部から肩部にかけての破片である。

第52図は、口径約27cmを測る勝間田焼の甕である。頸部から緩やかに外傾しながら口縁部にいたる。口縁端部は、丸くおさめている。胴部下半は欠損しているが、胴部外面上半には格子目のタタキが施されている。内面はナデ仕上げである。

5 ま と め

深田河内遺跡は弥生時代中期から中世にわたる複合遺跡であるが、各時期別にみると遺構の密度はまばらで、集落構造など決して多くを語るものではない。従って、ここでは各遺構の所属時期の検討を行いまとめたい。

まず、弥生時代の住居からみてみよう。時期の認定に最も有効な土器の絶対量が少なく、決して好条件を備えているとは言いが、若干の検討を加えることにする。住居址1出土の第11図3の蓋形土器は、西吉田遺跡の編年(註1)で西吉田Ⅲ式としたものの中の同形式の土器と比較した際、やや古い様相を備えているようである。すなわち、西吉田Ⅲ式例は斜格子目文、凹線文が交互に施されるのに対し、本住居例では1段のみの施文となっている点である。これは伴出する他の形式の土器からみても容認される変化と考えられる。従って、本住居の時期は西吉田Ⅱ式期に求めることができよう。さらに、第11図18の胴部が鋭く張り出した器形の蓋形土器は西吉田Ⅱ式としたものの中に全く同一形式のものがあり、この比定を補強するものと考えられる。住居址2出土土器も個々の土器を比較すれば住居址1出土土器との差異も指摘できようが、同時期の所産と考えられる。

古墳時代に属する遺物を出土した遺構は住居状遺構4・5、段状遺構1、土壌1・2の5遺構である。この内まとまった遺物を出土したのは段状遺構1の1遺構だけであり、他はいずれも数点以下の出土である。このため、所属時期を決定するには心もとない資料である。従って、段状遺構1出土土器を中心に検討を行ってみたい。段状遺構1出土の須恵器杯蓋・身(第24図1~8)は口径が12~13.5cmと小さいこと、身の受け部立ち上がりは短く内傾していることなどの特徴があげられる。これらの特徴は大府陶色占窯址群における田辺昭三氏の編年(註2)のTK-209、中村浩氏の編年(註3)のⅡ型式6段階に対応するものと考えられる。

次に、住居状遺構5の杯身(第22図1)は段状遺構1のそれに比べて口径が大きく、やや古い様相が指摘されよう。これは先程の田辺編年ではTK-43、中村編年ではⅡ型式4段階に対応するものと考えられる。また、段状遺構1からは15点の鉄滓が出土している。鍛冶炉をもつ段状遺構3からも5点の鉄滓が出土しており、これら製鉄関連遺構群として一括したものは、

上記の須恵器編年から6世紀末から7世紀前半の年代が与えられよう。

中世の遺構としたものには建物址3棟がある。この内建物址3・4に時期を推定できる一括遺物がある。建物址3の遺物には若干の混在が認められるが、勝間田焼の碗と小皿が主体を占める。建物址4も勝間田焼の碗が主体を占めている。これらの勝間田焼の碗の特徴は口径が小さく深いことがあげられよう。この特徴を伊藤晃氏の勝間田焼の編年(註4)に照らし合わせてみると、Ⅰ期～Ⅱ期に対応し、その年代は11世紀末から12世紀代が与えられよう。

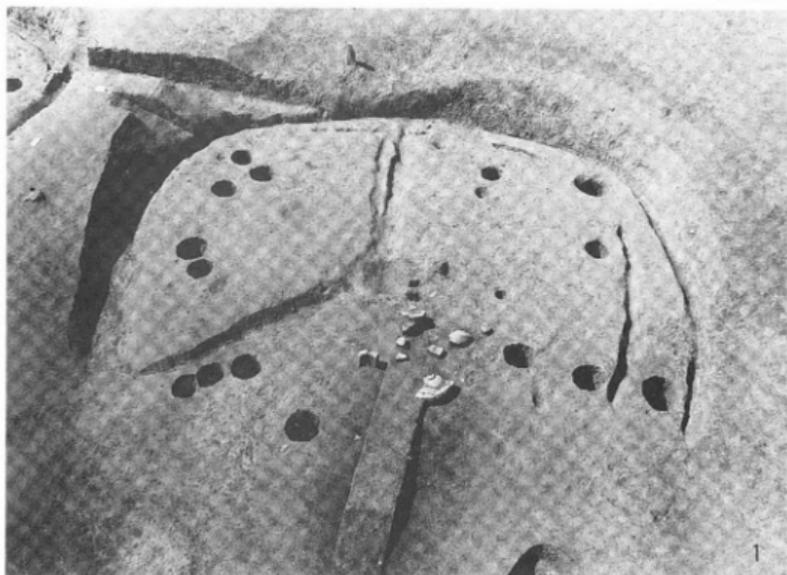
(註1) 行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 1985年

(註2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

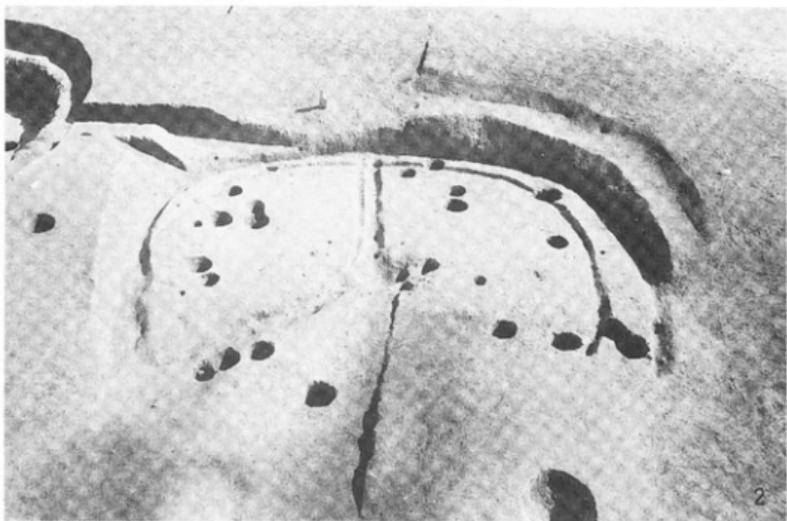
(註3) 中村 浩『和泉陶器窯の研究』柏書房 1981年

(註4) 伊藤 晃『窯業』『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

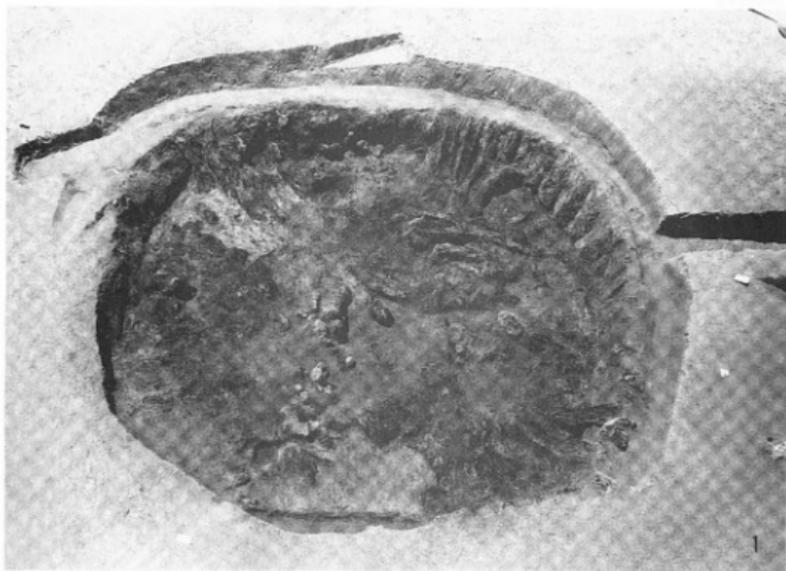
圖 版



住居址1 全景（北から）



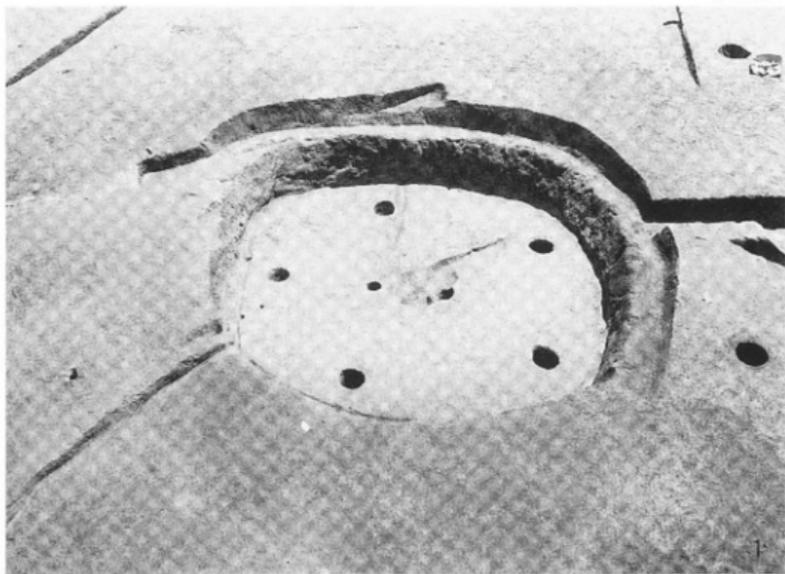
住居址1 張り床除去後全景（北から）



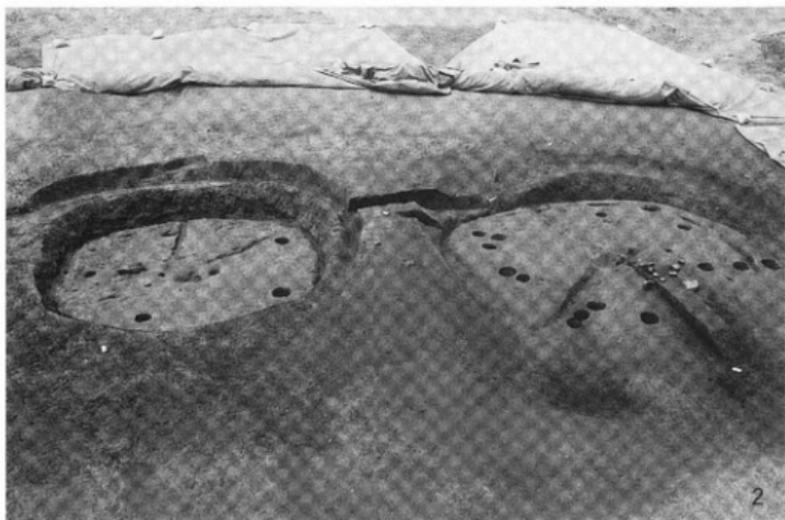
住居址 2 炭化材出土状況全景（北から）



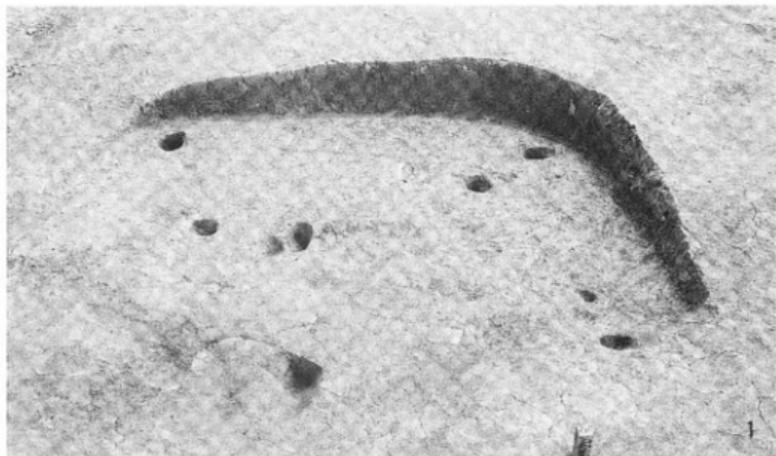
住居址 2 炭化材出土状況



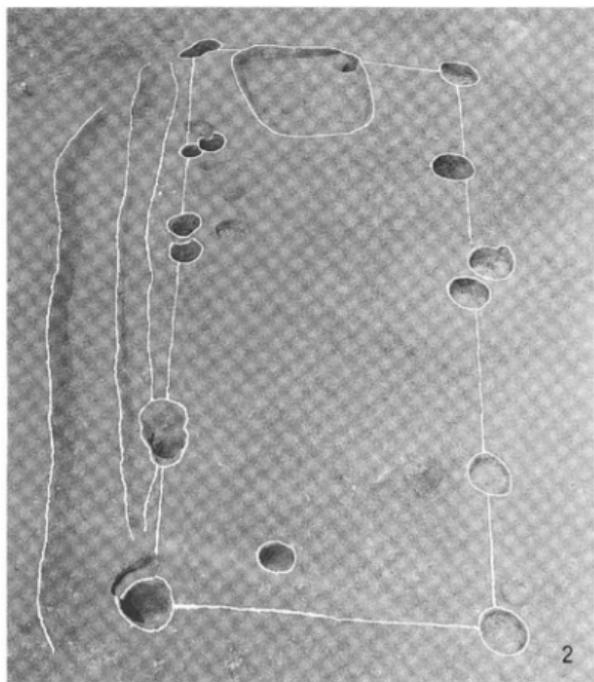
住居址2 炭化材除去後全景（北から）



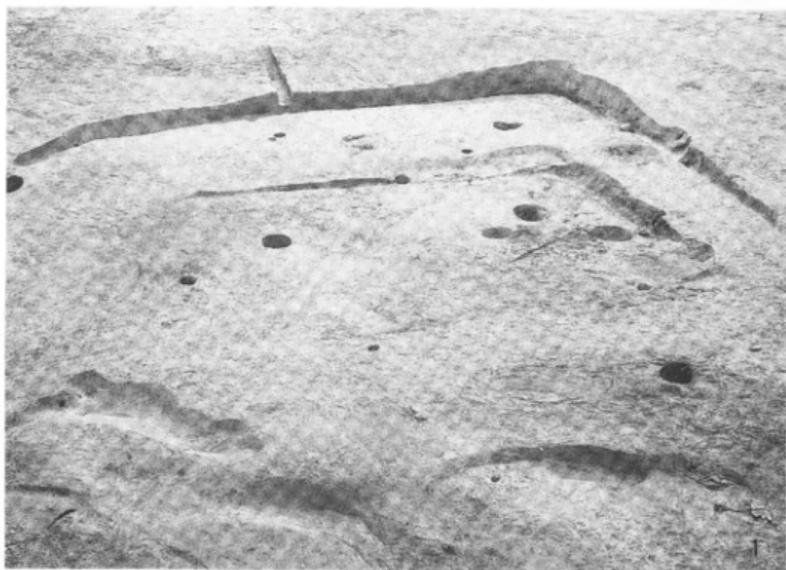
住居址1・2 全景（北から）



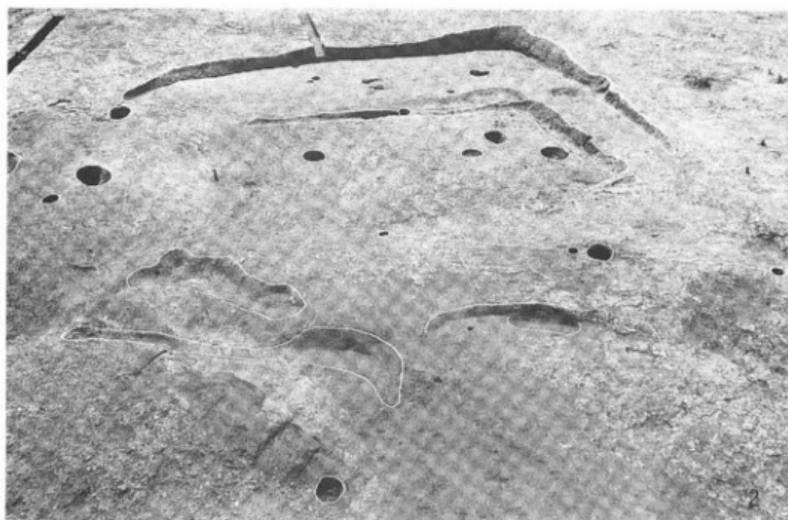
住居状遺構3 全景（北から）



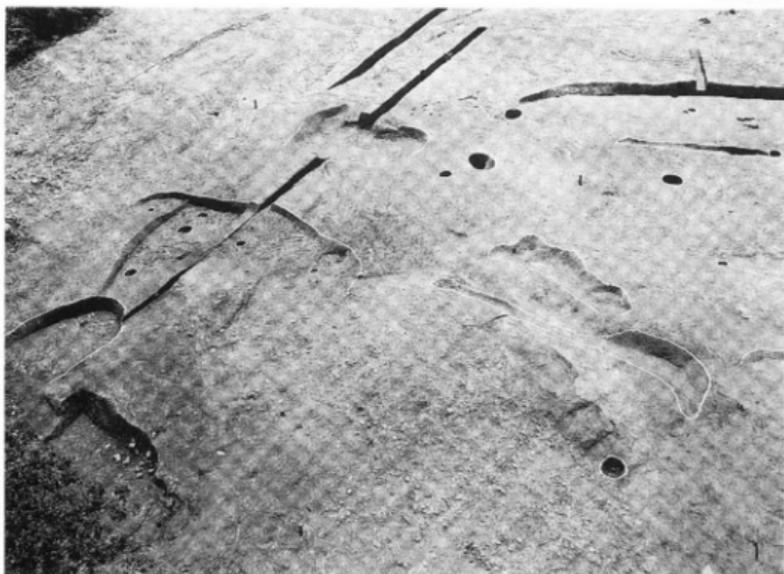
建物址1 全景（東から）



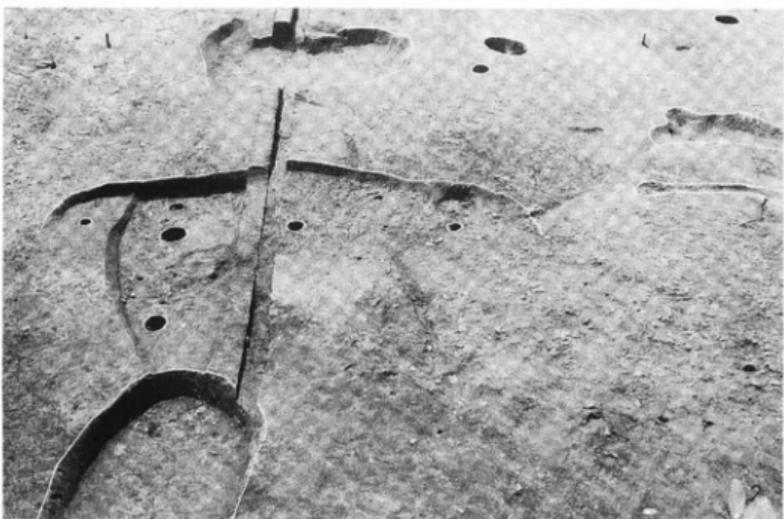
住居状遺構 4・5 全景（東から）



住居状遺構 4・5，溝 1・2，段状遺構 2 全景（東から）



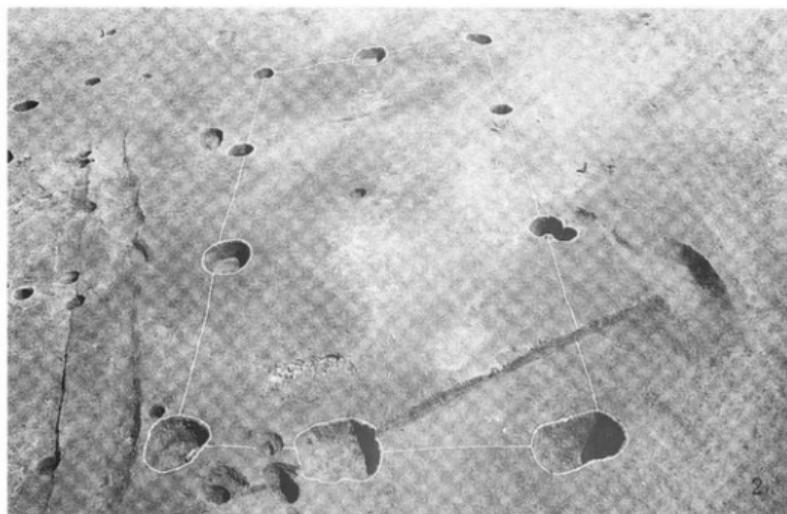
土坑1・2，段状遺構3，溝1・2 全景（東か5）



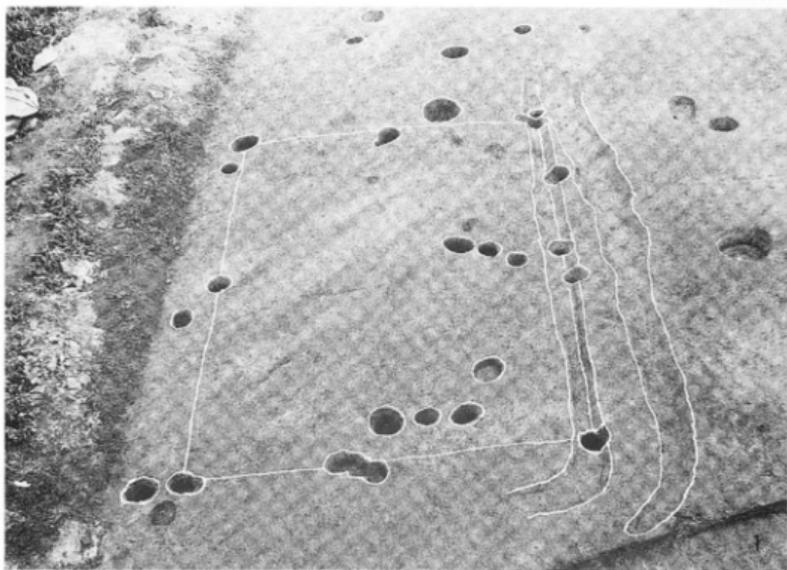
土坑1・2，段状遺構3 全景（東か5）



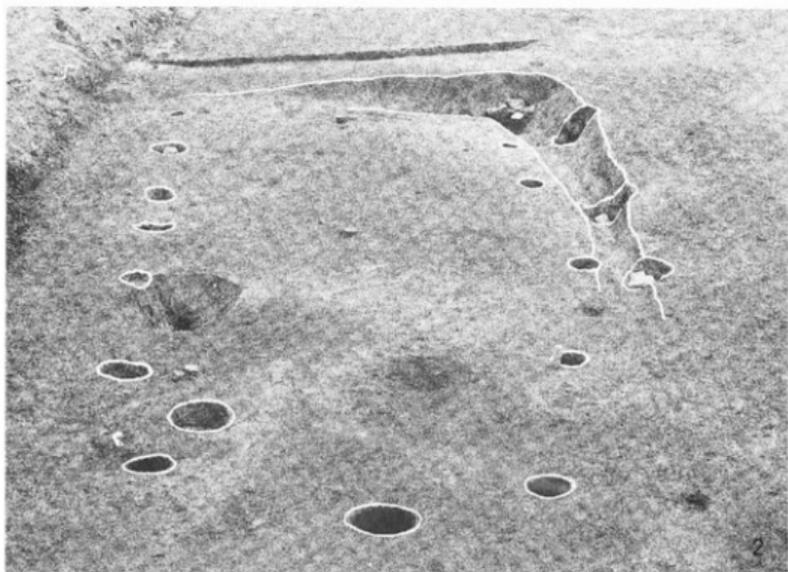
段状遺構1，土坑9 全景（南から）



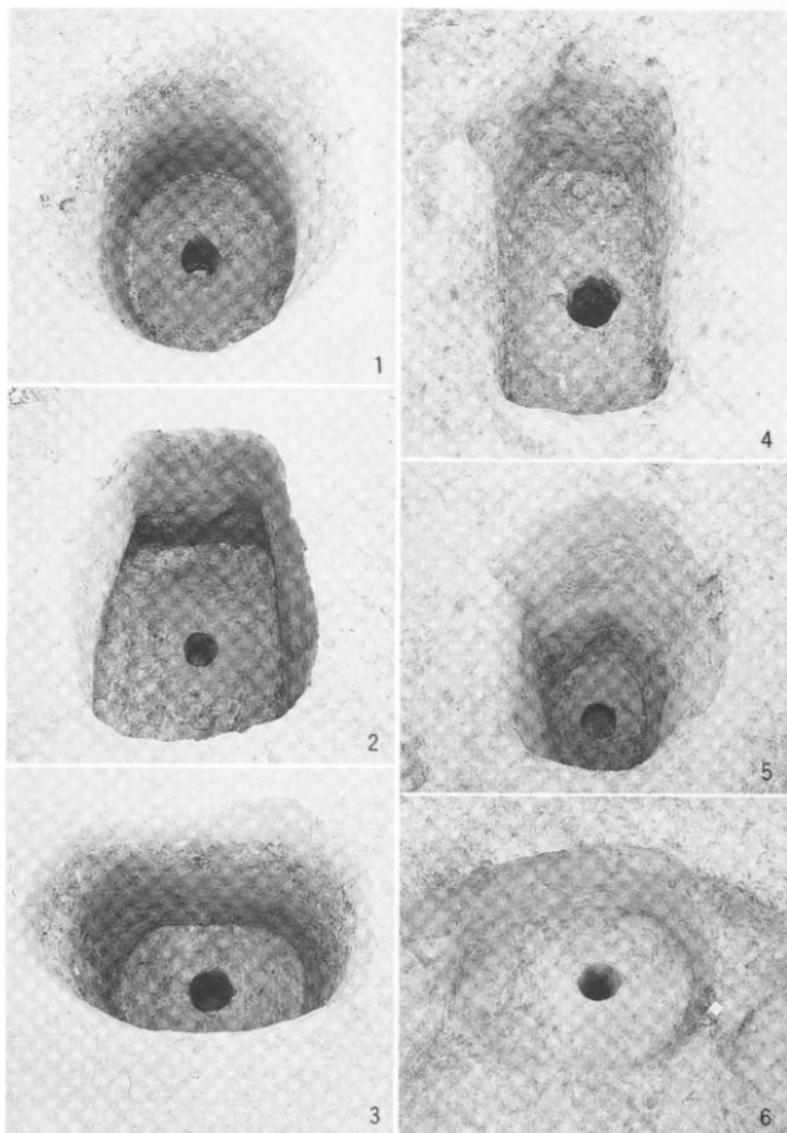
建物址2 全景（北西から）



建物址 3 全景 (北西から)

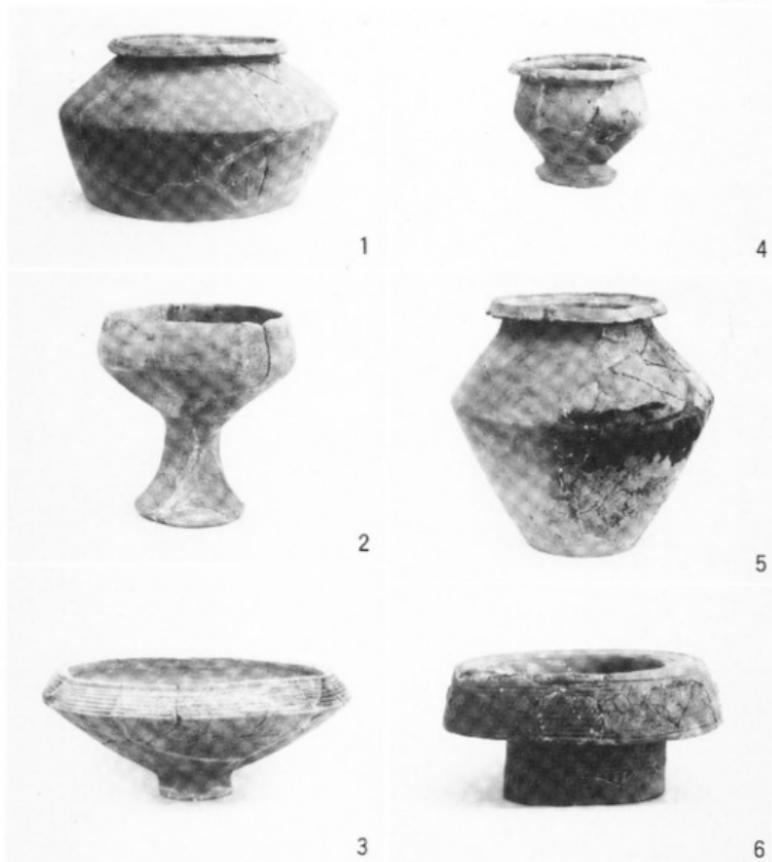


建物址 4 全景 (北西から)



土 壺

- | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|
| 1 : 土壺 3 (東から) | 3 : 土壺 6 (東から) | 5 : 土壺 8 (東から) |
| 2 : 土壺 5 (北東から) | 4 : 土壺 7 (北東から) | 6 : 土壺 9 (東から) |

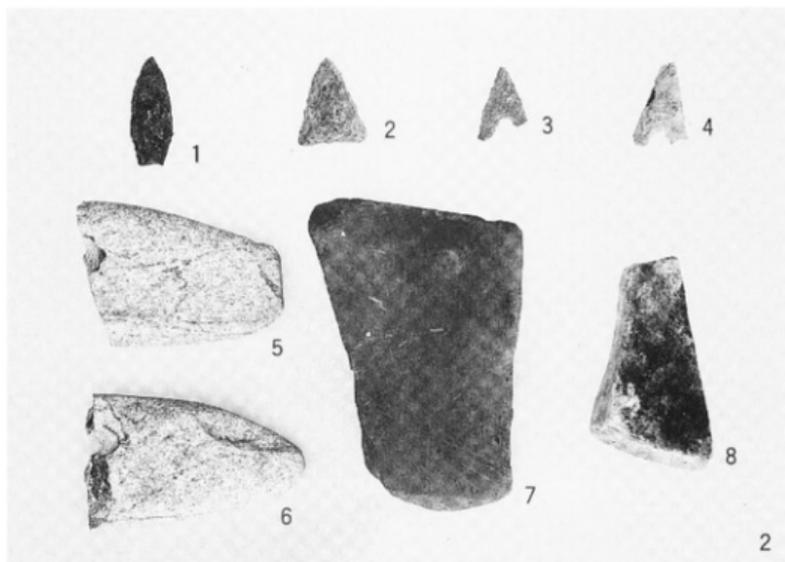


弥生土器

(1-3:住居址1, 4:住居址2, 5・6:ユウリ)

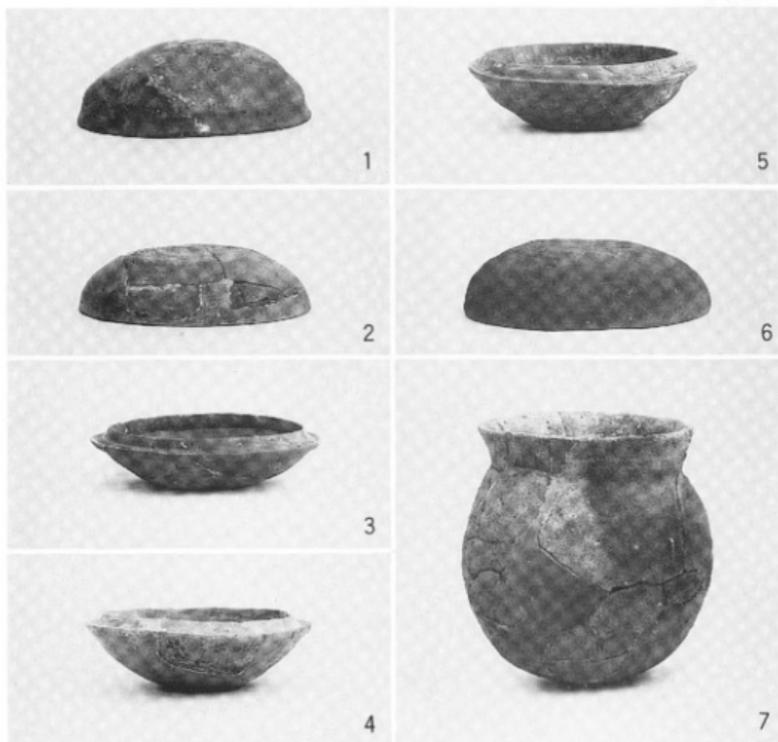


弥生土器（ユウリ）



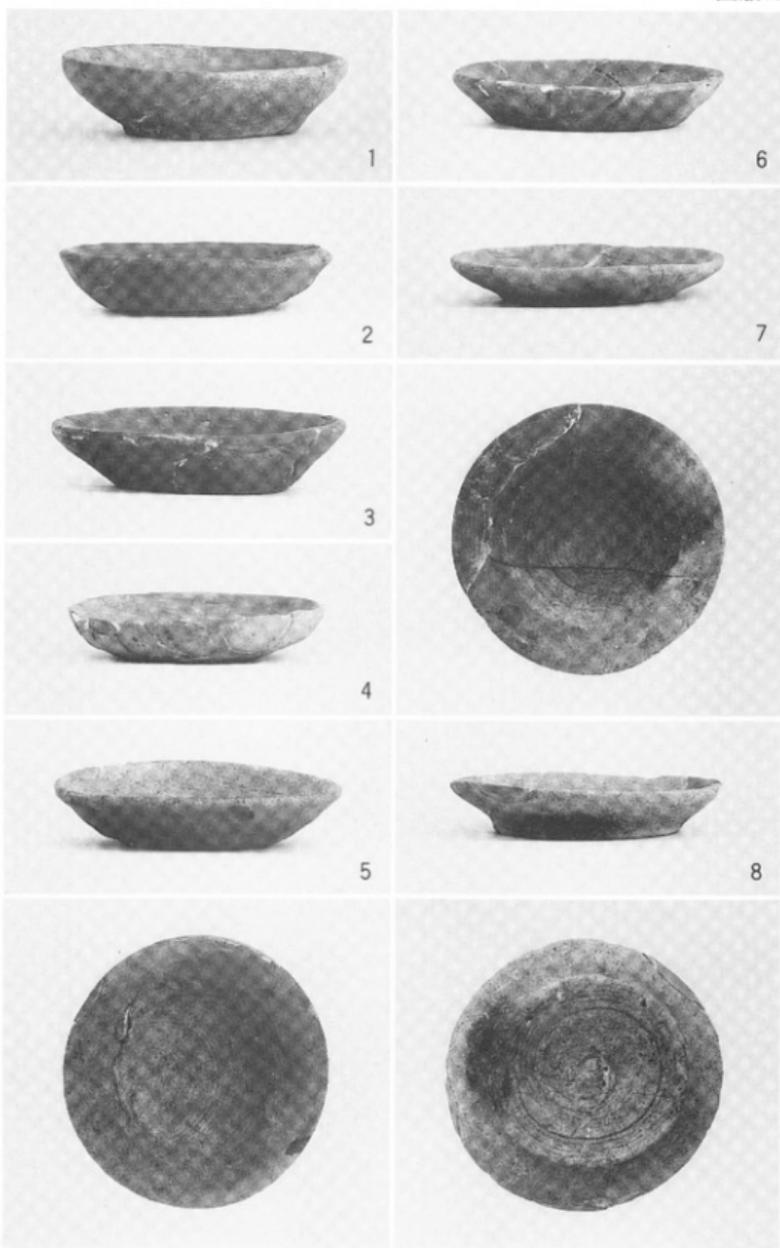
石 器

(1：住居址1，5・7・8：住居址2，6：建物址1，2：建物址3，3・4：ユウリ)

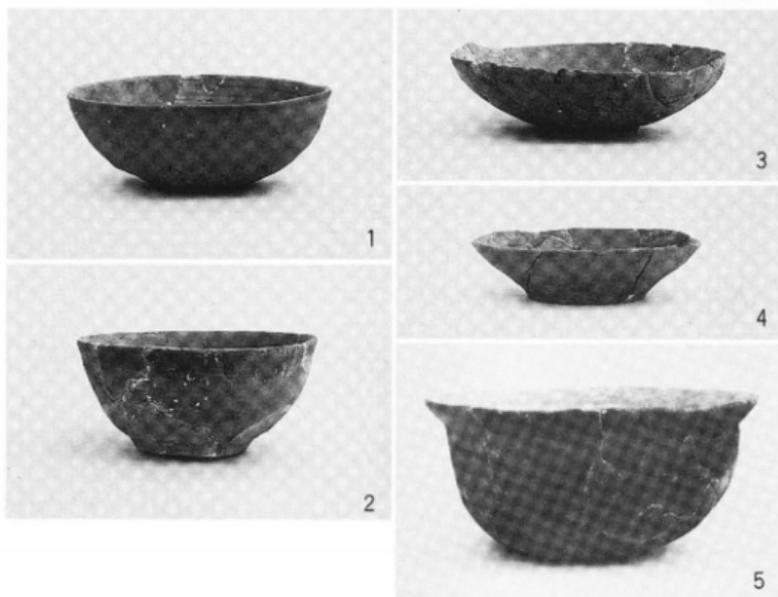


須恵器・土師器

(1～5:段状造構1, 6:住居状造構5, 7:住居状造構4)



土師質土器 (建物址3)



勝間田焼・土師質土器（建物址4）

津山市埋藏文化財発掘調査報告第26集

深田河内迹跡

—津山中核工業団地埋藏文化財発掘調査報告2—

昭和63年10月31日発行

発行 津山市土地開発公社

津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷 ㈱ゴトウ印刷
岡山県津山市西寺町63